

聞き書きによる地域資源の共有化と世界遺産

—シマ（集落）学から問われているもの

菊地 直樹

■ 参加者

話題提供者：中山 清美・岡野 隆宏・田畑 満大・泉 和子・新元 一文・大島北高生（川上智香・萩原 千桜・豊田 翔・中村 日留生）菊地 直樹（コーディネーター）

会場参加：瀬戸内町・龍郷町・宇検村・名瀬地区・笠利地区のシマ学の皆さん、約 50 名

場所：鹿児島県笠利町太陽が丘「農村改善センター」

日時：2014 年 12 月 20 日（土）13 時半～16 時

参加団体：けんむん村、NPO あまみ FM、住用やむららんど、瀬戸内町・宇検村・龍郷町・笠利・名瀬のシマ学、大島北高聞き書きサークル、笠利文化財サポーターでいいでい

■ 参加者

■ 主なスピーカー

中山 清美：元奄美市立奄美博物館長。2011 年 4 月から宇検村公民館、2012 年から奄美市笠利公民館、2013 年から名瀬公民館講座で「シマ（集落）遺産調査」を始める。2013 年度から龍郷町教育委員会の事業で「シマ（集落）遺産調査」を行う。奄美に棲むと言われ、畏れられる小妖怪「けんむん」の精神を活かし、行政でできないもの、民間でできないもの、忌憚のない意見が言える村として農家、商業、役所職員、教職員、老人クラブ等の有志による「けんむん村」を結成し、現在村長を務めている。

岡野 隆宏：現在、環境省自然環境局自然環境計画課生物多様性地球戦略企画室生物多様性施策推進室室長補佐。1997 年に環境庁（現・環境省）入庁。環境省のレンジャーとして阿蘇の草原や八重山のサンゴ礁の保全再生に関わる。2005 年から 2008 年まで世界自然遺産専門官。2010 年からは鹿児島大学特任准教授として、地域からの環境論を目指す「鹿児島環境学」に取り組み、「自然環境の保全と活用による地域づくり」をテーマに、主に政策的手法について研究。2014 年 4 月より現職。2013 年は奄美・琉球世界自然遺産候補地科学委員会委員。

■ はじめに

鹿児島県奄美大島では世界自然遺産の登録に向けた活動がおこなわれている。そうした状況のなか、奄美文化財保護対策連絡協議会（奄文連）をはじめ、観光関係者等により、地域資源の共有化をはかり、世界自然遺産を使いこなすための取り組みがおこなわれている。特に奄文連がおこなっている「奄美遺産」活動では、12 市町村がそれぞれで「畏れ、敬い、護り、残し、伝えたい」シマ（集落）遺産調査に取り組んでいる。それぞれの島の自治体で取り組んでいる「聞き書き」活動はシマ（集落）を知り、地域資源を共有するための調査活動といえる。自分たちで足元にある宝を自分たちで再確認し、市町村遺産から奄美群島の宝とする奄美遺産に認定し郷土学習をはじめ、地域振興から文化観光、そして「環境文化型」の世界遺産も視野に入れた取り組みとして発展している。

今回は、奄美遺産活動に具体的に取り組んでいる方々に集っていただき、それぞれの取り組みを報告し合うことにより、知識の共有化をはかることを試みた。こうした取り組みは、総合地球環境学研究所がかかげている「多様な人々との対話を通して得られる洞察や発想を拾い上げ、今後の環境問題の解決にむけた研究に活かす」という趣旨の研究テーマとも一致するものであり、トランスディシプリナリティ研究の実践でもあ

る。

なお、中山清美氏のご尽力により、この座談会はシマ学関係者をはじめ多くの地元住民が集まる場となり、シンポジウムにより近い性格のイベントになったことを付記しておく。また、三社の地元新聞社の取材を受けたことも付け加えておきたい。

■ 対話の記録

あいさつ

中山：今日はシマ学をやっている皆さんがこうして集まってくださいました。シマ学をやっていてどういったことがわかったか、また、こういったところはもう少し取り組みたいということがいっぱいあるかと思います。今回、総合地球環境学研究所の菊地直樹先生からシマ学の報告を行い、皆さんと共有する座談会をしたいという提案もあったので、最初に、菊地先生にお願いしたいと思います。そして菊地先生のおかげで、去年までこの調査に携わり、現在環境省に戻りました岡野隆宏さんも今日いらっしゃいます。今日は雨が降って大変だったところ、来ていただきましてありがとうございます。それぞれの報告が終わったあとに、皆さんと座談会に入りたいと思います。では菊地先生、お願いします。

趣旨説明

菊地：皆さん、こんにちは。奄美に来るのは2回目です。今年の2月に初めて来ました。4日だけだったのですが、シマ学の取り組みをお聞きして、非常に共感したというか、すばらしい取り組みをされているんだなと思い、また近いうちに来たいと考えていました。こうして、また奄美に来ることができて、とてもうれしく思っています。

今日はこういうタイトル「聞き書きによる地域資源の共有化と世界遺産—シマ（集落）学から問われているもの」、ちょっと仰々しいんですね。まあ難しいことを考えるというよりも、聞き書きという取り組みを通して、地域の宝物を共有化していらっしゃいますね。それが、奄美からもう少し広いところにもつながっていく。そういう場になれば、ととてもうれしいですし、奄美の皆さんにとっても意味がある報告会・座談会になると思ひまして、このような場を設定させていただきました。こうしたことを考え、中山先生にいろいろ相談していたら、今日はこんなにたくさんの方が集まり、とてもびっくりしています。

私が所属している総合地球環境学研究所、通称、地球研と呼んでいます。知っている人いますか？1人もいないですね。残念な知名度ですけども、京都にある国立の研究所です。いろいろなプロジェクトを実施しています。10ぐらいのプロジェクトが動いています。東南アジア、アフリカ、インド、アメリカ、様々な地域で環境問題の解決に向けた総合的な研究をするところです。この研究所では、環境問題を人間と自然との関係の問題として考えています。人間と自然がどのように関係をしているのだろうか。そうした関係のあり方によって環境が悪くなったり、よくなったりするんじゃないかということですね。もちろん地域の特性とか歴史的な違いもありますので、それを十分に考えていきます。たとえば奄美だったら奄美で人間と自然がどのような関係なのかを、総合的に考えていくということです。あと、「未来可能性」という言葉も使っています。持続可能性という言葉は、たぶん皆さん聞いたことがあると思うんです。未来可能性とは、未来に向けてどんな可能性があるのかを表わす言葉です。持続可能性とは少し違うんですが、まあそこはあんまり細かく見なくてもいいかもしれません。人間と自然の関係を総合的に考えようとする、私たちはやっぱり現場から学ばなきゃいけないです。では、どういうふうにしたら人間と自然がよりよい関係になるのか。いろんな現場の人と一緒に考えようとしているんですね。私が地球研で仕事しているのは「地域環境知



写真1 座談会の様子（鹿児島県笠利町太陽が丘「農村改善センター」）

プロジェクト」です。これまた、ちょっとややこしい名前ですね。環境を保全していく地域づくりでは、いろいろな人たちが、協働しながら、環境に関わるさまざまな情報とか知恵とか工夫を培っていると思うんですね。それらがどのようにしてつくりだされているのかということをはっきりとしようとしています。

その一貫として、今年の2月に奄美に来て、中山先生を始めとしていろいろな方にお話を聞かせていただきました。私にとって奄美は非常に興味深い、印象に残っています。中山先生はけんむん村の村長ですが、けんむんの話には私は非常に衝撃を受けました。こういう話が今でも生き生きとして残っている。全国各地を歩いています、奄美にしかない人と自然との関係だなと思ったんですね。それで非常に興味を持ちました。さきほど、ぜひまた来たいと話しましたが、奄美の皆さんと何か一緒にしてみたいという気持ちが起こってきたんですね。

私は地球研にいますが、2年ほど前までは兵庫県の豊岡市で、一度は絶滅したコウノトリを野生に戻すという仕事をしていました。皆さん、この写真に何人、人がいるかわかりますか？

複数人：3人。

菊地：3人ですか。4人ではないですね。手前はコウノトリです。人間に見えませんか。なんとなく見えますよね。今日は聞き書きがテーマですが、私もそういう仕事をけっこうやっているんです。これは、1918年生まれの方が子どもの頃の話です。学校から帰って昼飯を食べにこの帰っていたら、田んぼになんかシャツ姿の人がいたので、まだ暑いのに昼も食べずに何してんだろう、と思って見に行くと、ツルがいた。当時はコウノトリのことをツルとっていたんですね。人だと思ったらコウノトリだったという話です。このように、人とコウノトリは非常に近いところで、お互い暮らしていることがわかる写真です。またそのことを伝える聞き書きですね。コウノトリは人間と近い関係にいたので、

いろいろな影響があって、1971年に滅んでしまったんですね。それに対して人間が飼育して数を増やして、2005年からまた外に戻しています。では、コウノトリを戻そうとすると、自然をよくしなきゃいけない。ではその自然とはなにか。やっぱり農業を元気にしなきゃいけない。環境教育をおこなったり地域への誇りを培ったりすることも大事です。地域の外との人とのつながりをつくるとか、またそういったことを通して経済効果が生まれてくる。この地域で暮らしていける経済のあり方ですね。実はこうした総合的な取り組みなんですね。私はこういう仕事を13年ぐらいやってきました。

そういうなかで、サイエンスカフェ、これもカタカナで申し訳ないんですが、まあいってみれば座談会みたいなもんです。いろんな人が集まってコウノトリのことを話し合う場を商店街のなかにつくりました。2008年の9月から毎第三日曜日にやっています。コウノトリに関心がある人、ない人。行政の人、研究者、学生、農業者とかいろんな人が集まって、コウノトリから地域のことを考える。今度で72回ですね。

豊岡でもおもしろい取り組みがあります。今日は高校生が来られていますので、ぜひ紹介したいなと思います。豊岡市は生物多様性地域戦略というものをつくったんですね。行政の計画は、基本的に大人が作りますね。豊岡の取り組みで斬新なのは、6人の高校生が委員になっていることです。高校生たちが一緒に生物多様性を守るために地域をどうしていくかについて、大人と一緒に考えたんです。なぜ高校生なのか。15年後、17歳の高校生は32歳になります。32歳というと社会の中心をだんだん占めるようになる年齢ですね。15年後の未来を考えるということは、実は高校生が当事者じゃないかという発想です。若い人たちが参加して考えないと、未来のことを考えることにはならないのではないか、ということですね。高校生が参加すると、大人も刺激されるようです。重箱の隅を突ついたりとかではなく、ちゃんと議論しようという感じになるんですね。高校生が参加して生物多様性の地域戦略をつくったことがあります。ここ奄美でも高校生たちが活躍されていると聞いています。もしかしたら、いろいろな地域でこういうことが起こっているかもしれません。

最後に聞き書きです。一緒に研究している仲間に北海道大学の宮内泰介さんという人がいます。宮内さんは、聞き書きの効用をいくつかあげています。当然、人と出会いますよね。奄美にいても実はなかなか会わない人たちっているかもしれませんが、こういう取り組みをすると人と出会うし、あるいは改めて地域を発見するということもあるかもしれません。またお互いが成長する、やはり知らないことをお互い学び合うということもあるでしょう。また、そういうことを伝える。たとえばコウノトリの場合だと、おじいちゃん、おばあちゃんがコウノトリをどのように見ていたかとか、その当時どんな生き物がいたかって全然伝わってないんですね。それはなぜかという、当たり前のことはなかなか伝われない。たぶん改めて話さないと思うんです。たとえば50年前に、田んぼにどんな生き物がいたかとか、畑にどんな生き物がいたかっていうのは、お孫さんとか子どもさんに話さないと思うんですね。でも、聞き書きをすると、そういうことが伝わっていくと思うんですね。また、そこから行動へつながったりすることもあるでしょう。聞き書きとはこうした取り組みじゃないかと思うわけです。聞き書きは昔の話を丹念にいろんな人に聞いていくという地味な取り組みですが、実は地域を見直したりとか、人と出会ったりとか、お互い成長したりとか、伝えたりとか、いろいろなことを引き起こすおこないでもあると思うんですね。聞き書きを通して、これから人と自然がどのようにしたらうまくやっていけるかを考えることができるんじゃないか。私たちの研究所でも、そう考えています。この奄美で皆さんがすすめられている聞き書きの取り組みは、とても先進的で、皆さんの取り組みから学びたいです。そして、今日の座談会が、一緒に考えていくきっかけになればと思っています。少し長くなりましたが、趣旨説明です。どうもありがとうございます。

中山：どうもありがとうございました。聞き書きをやっているときには、私たちが怖れて敬って守って残して伝えたいものとは何かということ、皆さんと考えながら皆さんの視点で見てくださいという

うことで取り組んできました。そういう取り組みが、地球研のほうからもお話がありましたように全国的でもやっているんだけど、奄美の取り組みが世界自然遺産と自然と環境という取り組みと同じように、自分たちの足元を見直すっていうことの大切さっていうことになります。つながっているということです。こういった取り組みが今、一番、奄美に必要じゃないかなと思っております。

今日これから、今まで聞き書きをやってきてどういったことがわかったかっていうことを10分から15分程度で紹介をしていきたいと思っております。

まず最初に田畑満大先生。よろしくお願ひいたします。

話題提供：屋敷林の利用植物

田端：話をする皆さんは全部、現代的に映写をしてわかりやすくしてくださるんですが、私は原始人としてそういうことがよくわからないので、口だけで説明します。私はどっちかといいますと、植物だけをやってた人間です。中山先生のほうから「龍郷町の各集落の文化遺産を調査、加勢してくれんかい」と。「君にできることは、どういう植物が集落の屋敷林として生えているか。その樹種がどういう利用のされ方をおったのだろうか」と。そういうことで、龍郷町をちょっと調べましたけれども。まだ、まとめてこういうふうに皆さんにお見せすることができれば一番よかったです。まだ十分にまとめてございません。それと同時に各集落の方言を調べたりしております。私たちが使っているのは、日本全国に通用する和名ということですが、各集落に全部名前が違うんですね。それと、耳の悪いせいか、あたりまえに発音どおりに表記できない。そういう問題などがあって、非常に困っているんですが。幸いに、龍郷町の浦の方でしたかね、重野さんっていう言語学の研究なさっている方がいまして、龍郷の方言を調べているだけは、自分たちがやっている表記どおりに書いてみようっていうことで。あと何年か後にはまとめて、皆さんにお見せすることができるかもしれません。

龍郷町の集落ごとの屋敷林。こう古い屋敷林などを眺めて歩きましたが、昔はガジュマル主体ですね。そして、子どもの頃は、奄美というと夏はカンカン日照りで直射日光が暑くてたまらなかった。けれども、そういう木陰、屋敷林があると非常に涼しい。調査をしながら、1つ1つ、ああ、これも大事だなあとか、いろいろ思ったり、いろいろしてきました。最初は「屋敷の木の名前だけを調べてください」と、中山先活から頼まれたんだけど、やっている調査の回を重ねるごとに、ああ、こういうのも必要じゃないかと。いろんな視点から考える調査がふえてきたわけです。

龍郷町全体、各集落、北風もまともにあたるところ。海岸林も最近はなくなっております。まず、海岸林の大事なことは防砂、防潮、防風。そういう海岸林の働きがありますが、海岸線の地形の問題も考えていかないとかないなあという問題提起もしたいなあと思ったりしております。というのは、アダン林があればアダンだけでそういう働きをするかということそうじゃなくて、砂浜であれば、砂を飛ばさないようにする植物、たとえば、ゲンバイヒルガオとか、いろんなほかのものが生えております。その後背のほうに、クサトベラとか、いろんなハマゴウとか、その後ろのほうにアダンがあって。アダンだけでは十分じゃないわけです。そして、その後ろのほうに海岸林を代表するアカテツとか、あるいはオオハマボウとか。そういう木が重なって—私は重層構造と呼んでいます—もろもろの植物が海岸林を成している。これからは、海岸林のつくり方も考えて、集落の植物も調査しないとイケないと思ったりしております。

屋敷林のなかに、昔は藁葺きだったわけですね。そして、屋敷を掘り下げて、土手を積んで、その土手の上に樹木を植えていったわけです。昔あれをカンギと呼びましてね。カンギって、主にガジュマル、ヤブニッケイが。たとえば、藁葺きの屋根は燃えやすいですが、燃えやすい木がそこに植えてあるか。そういうことまでちょっと考えたりしたんです。それから、龍郷町の屋敷林のな

かでも、タチバナ、アクチが生えています。なんのためにこの木が植えられているのかな。そういうことなどを考えてみたんです。何十年前から奄美のバイブル的な存在だと言われている『南島雑話』、それを繰り返し、繰り返し読んでおったら、ある時期に、沖縄で焼き物をしておりますが、その焼き物に使う灰を商売しておったんです。だから、非常にその木を植えたということが書いたって。ああ、1つの謎が解けたなあ、という思いでした。そういう調査をしながら、泉さんのほうで食文化のことで調査しております。たとえば、昔、屋敷のなかにちっちゃな野菜畑、アタリって呼んだんですかね。そのアタリと呼ばれるなかで、最近、大きい畑に比べて栽培はしますが、とりあえず、ご飯を炊きながら野菜をとってきて調理ができる。そういうものがアタリの野菜栽培じゃなかったか。それから、行事のときにお餅をつくるためのクマタケラン。サネンですね。そういうものなどはやっぱり屋敷のなかにちゃんと植えてあったんですね。それから、龍郷の屋敷林の1つはまだ残っておりますが、新しいところはほとんど建築様式が変わってきて、太陽など関係ない、そういう丈夫な家がたくさん建っております。屋敷林などは、今までの屋敷の、大きなガジュマルは途中から切って、目隠し、生垣ですかね、そういうふうにある程度剪定して整っていたんですね。今は全部きれいになって。

それからもう1つ多かったのはハウライチク。皆さんのところで、キンチョウとかキンショウとか、いろいろ集落によって呼び方は違いますよね。これを植えてある。これはなぜかっていうことですよ。まず防風にもなりますが、アタリ、もとは鶏などが放し飼いにして、その野菜畑を、垣をつくってやっておったところあるかと思えます。野菜畑もあちこち遠くへいったときでも、野菜の蔓植物であれば、その支柱に利用する。半日陰のところにあるのは竹がすうっと出ますよね。割ってもびしゃっと割れます。しかし、日がカンカンあたっているところは、割ってしまうと、こうひねってしまいますよね。

私のところであればサトウキビたくさんつくってましたから、サトウキビを結えるのに、結束するために割ってオビをとるわけですよ。それで、結束したわけですが。人を頼むと、そういう準備をしておかないといけない。そういうことでオビをとったり。いろいろ利用されたわけですよ。ハウライチクは。たとえば、河川工事なども崖が崩れたとき、松の杭を打って竹そのものを編んでいくとか、いろんな使われ方もしました。屋敷にやはり利用価値のあるものを植えてあったわけです。どうもありがとうございました。

中山：ありがとうございました。今おっしゃってたのは、わきゃ（私たち）が使っている屋敷林ではどのような植物があるのかってことです。屋敷林のなかには何かに利用されている植物が多いよねっていうのが、シマ学を通してわかってきたんです。さっき、屋敷林のなかの重層構造っていう新しい用語で語っていただきました。もう皆さんご存知のように、まず浮かぶのは、シマミカンであるとか、今ごろは柿がなつたとか。バナナであるとか、バンシロであるとか、食べられる果物がほとんどなんですよ。シマの屋敷林は、やっぱりそういう食とも関係し、必要とするものを屋敷林として植えている。ヤブニッケイの話もされましたが、水を溜めるためにやったり、油をとるためにやったりとかの利用もあったんですね。非常に人との関わりのある植物が多いということが先生の調査のなかのひとつをまとめられていました。今日はちょっとほんのおさわりの部分を簡単にさあっと紹介していただきました。シマ学講座生の皆さんも、この垣根は、さっき言ったハウライチクは放っておくと高く伸びるけど、刈り込むと垣根にもなる、風よけにもなるっていう、そういうものだとおわかりになったかと思えます。

先生がもう1つ注目されているのは、各シマジマで方言、呼び名が違うということで、その方言の聞き取り調査も今合わせて行っています。ありがとうございました。

田畑：住用の西仲間でもお願いをして、方言を調べております。

中山：住用のほうも、住用方言があるわけですから、そういう意味で今日いらした皆さんから、それぞれまた教えてください。

いま住用の話題が出ましたが、住用ではすでにシマ学から今度 NPO ヤムラランドを立ち上げて、こういったものを観光に活かすことを具体的に取り組んでいらっしゃいます。それでは新元さんをお願いをしたいと思います。

話題提供：NPO住用ヤムイラランドの活動

新元：平成 21 年から 25 年度まで、住用産業建設課におりました新元います。4 月から紬観光課のほうに来ております。今しゃべられている方々は、聞き書きをされている方ですが、私は全然研究者じゃありません。とっともふわふわとした存在です。自分も役所に入ってからシマのことをよく知るようになりたいと思い始めました。当時、同じ職場というか、三儀山の管理をされていた清正芳計さんという唄者の方がいまして、その方の島唄を聞いてから自分がロックだのブルースだのとか言っている、ギターを持っていたのに、こんなにシマのものがいいのがあるのに知らなかったなど。しかも、自分より若い唄者がいるのに全然気づかずに、ということからどんどん入っていったわけなんです。そういった人たちをどうにか伝えたいなっていうこともあって、サーモン&ガーリックという変てこなバンドをしています。あれは入り口。

始めたときは怒られましたね。島唄の人たちから。そんなに唄を変えるなど。怒られたんです。これがあって、本物を知るといことで、そういったことをしています。この話で、なんでそんな話か思うかもしれませんが、実は私がやっているのは公私混同です。職場も同じようなことをしているような感じになってきました。観光の職場にも、しばらくいるもんですから。私が住用に異動になったときに、住用にしかないものとか、いろんなものがあって、すごく興味がありました。いろんな方々に話を聞いていくところで、ちょうどそのときシマ博覧会があったものですから、あれにいろんな人を出したいな、と。こんな人もいる、こんな人もいるよっていうのを出したいなということからはじまり。電話番号、人に教えて返事が来るのを始終待つておく。それを生業にしている観光業者でもないのに、それはちょっと難しいなと思ったところから、事務局をつくらうと。無理やりその当時に事務局をつくったところで、そこのおじいちゃん、おばあちゃんなんか、「いついつあるよ、来てくれん」ということのシステムをまずつくらないと、お願いした人に負担がかかってしまっはいけないなということから、当時、ヤムラランド実行委員会と無理やり名前をつけました。その業務が結構大きくなったので、そこにいる桑野さんに平成 21 年からその事業を担当してもらい、平成 23 年度に、国土交通省の事業をいただきまして、その組織化についてやりました。平成 24 年に国土交通省の事業もらい、25 年 26 年と今、観光庁の事業が入っています。そのなかで組織づくりと魅力づくり、そしてビジネス化に向けてという動きをしているところです。

ただ、それをしようかと思ったときには、どんどん人口が流出している。どんどん住む人がいなくなって、このままじゃ地域の過疎化が進むばかりで、どうにか止めたい。そこに産業をつくりたいというのが軸でした。そこにつなげないといけないということ、ビジネス化にもしないといけないんじゃないかという話です。皆さんの聞き書きの話と若干ずれるかもしれませんが、そこで、平成 25 年度末、岡野さんにこの聞き書きの調査をしていただきました。こちらの皆さん、田畑先生や中山さんにも協力いただきました。これ鹿児島大学の学生がつくった聞き書き調査報告書です。ヤムラランドの観光ツアーをよんだときに、受け入れた結果、何が出てきたかといいますと、実はそれをやることによって、青年らが手伝いはじめたと。8 月の練習をしているんだけど、それにも参加をするようになったというのが、一番の大きな成果だと思います。聞き書きも、文字に残る、活字に残すということも、その活動も、子ども、孫、子孫に今ある、あった状況を残すという継承活

動にすぐつながるなということ、すごく感じました。ヤムラランドの動きもその聞き書きを通してなんです。今後以降、ヤムラランドとしましても、いろんなデータがまだ集まってないところもありますので、住用地域のそういった聞き書きを通して、継承していけるようなデータ集めが重要だと思います。

私は袖観光課の職員ですが、観光でこんな話をしているのは、私とあそこにいる大山周作ぐらいです。なぜかといいますと、もともと観光というのは、今まで物見遊山の施設を周る観光であった、大型バスで周っていた。ところが今はインターネットもありますし、いろんな情報があって、しかもLCCが飛んでくる。今、個人旅行がいっぱいです。ここに来ていろんなことを調べたい、何々をしたい。バスに乗って周るんじゃないくて、レンタカーを借りて2、3人で来てとか、1人で来てというのが多いです。もっと自分はこんなことを知りたいというお客様もいっぱいいて。そこで、そういった案内をしてくれる方々がいると、すごく満足につながるし、なおかつその奥が見えてくる。奄美大島の本当に見せたい奥が見えてくるとういうのがある。聞き書き調査をした上で、それが若者たち、青年団とかそういった若者たちが、奥を見せるような、いわばサーモン&ガーリックのようなものになっていけばいいのかなど、実は思っています。データ取りにも、すごく聞き書きというのは重要だと考えています。ただ、役場の職員はいますが、この聞き書きが、市役所の仕事にはなかなかない現状があります。今後以降、見せたいもの、観光者に対して見せたいものがあります。

これからも大型観光は重要です。1年中、観光客が来るためには、もちろん大手の代理店も必要で、いっぱい来るのは必要です。ですが、じゃあこの方々が見たいものをつくるという活動は、今までは施設がほぼすべてでした。それを着地型観光といいます。出発地点の発地型観光。そのあとに着地型観光という名前に変わりました。着地地点の人たちからメニューを考えましょう、と。今それは進化をして、着地型から進化をして、滞在交流型観光。この地域に泊まることももちろんですが、何時間おれるか、何時間おもしろいことをつなげられるか、魅力を出せるか。これが滞在交流型観光といわれています。そこには魅力を言う人がいないと難しい。今、観光庁は何日間もいたらそこでごはんも食べるし、何々も買うしということになっていくんじゃないかとしきりに言っています。行ったところでバス観光、降りるところの観光のところはすごく栄えているんですけど、商店街とかすごいさびれている。観光を進めていくことが、地域を活性化させるんじゃないくて、観光業者ばかりを売っているんじゃないかということに、最近、観光庁も言い出しています。いろんな省庁が頑張っている取り組みに関連した観光の仕方をしましょうというのができます。それはもちろん、観光ではないんですが、ブルーツーリズム、グリーンツーリズム。農水省、水産庁がやっていることと観光担当が全く違う。ところが同じじゃないですか、という取り組みを、今度頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

中山：彼がサーモン&ガーリックの本人だということも、真面目な顔をして聞くと、ああ、こうだったというのがわかりだと思います。我々がやっているシマ学では、地域の皆さんが恐れ敬って守って遺し伝えたいものを書いていて、今回このパネルにしてもらいました。こういうふうにしてやっていると、ああこの集落にまた行きたいなと思ったり、地域の人がか大切にしているっていうものは、こんなもんだね。地域の人のお宝っていうのはこういったものがあるねと思います。さっき言った着地型観光とシマ学。シマ学が観光につながるのはまだまだ先かもしれませんが、シマ学で、地域の人たちが見せたいっていうものを、地域を誇れるものが見えてくると思うんですね。そういった意味では、これを観光にもつなげないといけないだろう。世界自然遺産に関われば、そういったものの対応とか、田畑先生がおっしゃった植物の関係でも見えてくる。自然だけじゃなくて、人々の暮らしが見えてくることもあり、さっき地球研の菊池先活からもあった自然と人との関わりっていう

こともここにつながってくるだろうと。そういったものを観光に活かしたいという思いがあります。住用のヤムランドでは、具体的にそれに取り組んで進めています。

それでは次は泉さんから、食という観点から集落の特徴と伝統行事に関する報告をお願いします。

話題提供：年中行事にみる食生活

泉：皆様こんにちは。泉といいます。昨年度から文化庁のシマ遺産調査ということで、シマ学に参加させていただきました。たくさんのことを学んだんですが、今日はその学んだことと、それから問題提起とか、どう活用していくこととか、そういうことを含めながらご紹介したいと思います。

伝統行事、食材からシマを知るってことです。秋になると食卓に上るマコモなんですけど、どんなふうになっているんだろうとか、どこを切ったらいいんだ、どの部分が捕食が可能なんだろうとか、その葉鞘といいますけど、上のほうの鞘の部分に、鞘を一枚一枚はいでいったら下のほうの可食の部分が割れてくるっていう。これも知らない、どうやったらマコモの実はどうんなふうに入っているのとか、いつごろ生えるのとか、やっぱりわからないのでお願いして、マコモの田に勉強にいきました。そういったことからシマを知ることにつなげていきたいと思います。

年中行事とか、伝統行事は年間を通してたくさんあります。集落の豊年祭とか、集落行事、そして家庭でする正月行事とかいろいろあります。今日はたくさんある伝統行事のなかから、「浜下れ」に絞ってきたいと思います。浜下れから見えるストーリーをまた地域資源とか観光振興を体験する。先ほどのマコモもですけど、体験することで、体験型の観光にもつなげていけるのではないかなと思っています。船をこぐ、船こぎ競争ですが、シマの人は海が道だった時代、交易とか交流、文化交流があった時代から、やっぱり船こぎはDNAとして残っていたのかもしれない。すごい船こぎ競争とかに燃えるんですね。おそろいのTシャツをつくったり。これ浜下れののぼりですが、これが象徴的なものになっていまして、シバマオ組とかカネコ組とか5班に分かれています。そして競争ですね。混合チームで競争いたします。これは優勝したチームです。舵取りがとても大事な役割で、名舵の人の功績で、優勝したっていう感じですね。一生懸命チームが一丸となって盛り上がります。これは浜下れが行われている同じ浜で、子どもたちは泥団子をつくったりして、ときどき船こぎ競争を見たりして、学習の場として記憶のなかに醸成されていって、大人になってもたぶん、あのころというのが浜下れという行事があったよねとか、たぶん記憶のなかに醸成され培われていくと思います。浜下れのあとの宴ですが、浜下れの朝、稲向けっていって、稲を取ってきて稲霊様にお供えして、豊作を祈願するために、それから虫をとってきて後ろ手で、海とか川に後ろ手で投げるんです。朝、そして集落の清掃をして、集落をきれいにさらえたあとに、シシ、琉球イノシシをとり山へ、集落をきれいにしたあとに山へ入っています。このことも意味があると思います。集落のごちそうですが、班ごとに分かれて、このようにいろんなごちそうをつくって、お重箱とか、班ごとにいろんな、料理得意な方がいらして、私はフクラカンをつくるのよとか、私は唐揚げとか、サンドイッチとかいろんなごちそうが用意されます。そのときイノシシの網焼きがおこなわれ、もっとシシ肉とかを食べるように促しています。これは焼肉ですね。このレバーもあとで焼かれたんですが、網焼きにしているところです。

これは、その同じ浜下れがおこなわれている海辺の横に、片隅にアカウミガメが産卵するところをちゃんと、3か所ぐらいだったんですが囲ってありました。こういった環境を大切にすることややっぱり考えられて、皆さんでしていらっしやいました。シマ学で、私たちいろんなことを学んできましたが、今に残る暮らしの記憶、シマの人から聞き出した記憶を、ストーリーをどのようにとどめてつないでいくか、今後、工夫が必要だという課題が残りました。そして、やっぱり皆さんの笑顔っていうか、生き生きとした素晴らしい笑顔をご覧ください。ほんの20集落、参りまし

たほんの一部ですけど、たくさんのごことをやっぱり学びました。とにかくシマが核となっていますので、私たちの暮らしが、昔はこうだった、ああだっている方からお話を伺ったんです。その1つ1つの記憶を、また私たちが話したり、いろんなことをされている方と連携したりして、またいろいろ語りついでいくのが、次の世代へって渡していくのがまた仕事だと思います。

中山：ありがとうございました。泉さんは、今、龍郷町 20 集落、それぞれ調べます。それぞれ1つの年中行事のなかで、この集落にはあるけど、この集落はないとかってことです。龍郷町内のなかでも地区の違いとか、植物の利用の違い、それを食べるものを通して、どういうふう食べるってということも含めて、調査をされております。そうしていくと、植物もそうですけど、食文化のほうも集落ごとに違うシマの独自性を食文化から見る視点も大切であることが、おわかりになったかと思えます。あとは、餅の関係も、前は研究会で報告されておりました。餅はどうして食べるのかっていうのもあって、これも観光に活かすときには、シマの人たちはどういったものを食べているんですかって、郷土料理、豚料理とかっていうの、豚料理は毎日食べてるのっていうんじゃないんで。豚料理を食べる時期とか、そして、それに伴う、さっきシシ(猪)を撃ちに行くときは、お祈りをしていくとかってということもいっぱいあるので、そういったのも含めて説明できればもっと、さっき新元さんが言った深い奄美が見えてくるかと思えます。

今度はこれをどうつなげていくか。今年から大島北高校生に、聞き書きをお願いして、今回参加をしてもらいます。大島北高生の皆さんは、赤木名での取り組みを頑張っているんですね。高校生の見た視点っていうものが、どんなものかなって、今、まとめている最中です。調査をやった中間報告ということで、今日4名来ております。今日がデビュー戦になりますので、少し、皆さんあたたかい目で見守ってください。では皆さんは自己紹介してください。

話題提供：奄美市笠利町赤木地区における聞き書き調査について（大島北高校聞き書きサークル）

川上智香：大島北高等学校2年A組普通科の川上智香です。よろしくお願いします。

萩原千桜：こんにちは。大島北高2年A組の萩原千桜です。よろしくお願いします。

豊田翔：こんにちは。大島北高等学校2年A組豊田翔です。よろしくお願いします。

中村日留生：こんにちは。大島北高等学校2年A組の中村日留生です。よろしくお願いします。

(拍手)

中山：始まる前から拍手をもらうっていうのはすごい。4人でどういうふうにしてやったかということ、これから紹介していただきたいと思えます。

豊田：私たちは、奄美市笠利町、赤木名地区において聞き書き調査をおこないました。まずは私たちの学校を紹介したいと思います。私たちの通う大島北高等学校は生徒数こそ少ないものの、「1人1人が主役です」をモットーにそれぞれに活躍の場があり、とても明るく元気な学校です。聞き書きとはシマの長老、名人から世代を超えた交流を通して、シマの伝統文化などについて学ぶ活動のことです。シマの長老、名人との対面。1、自己紹介をおこないます。2、話を聞く場所は落ち着いて話を聞ける場所がいいです。3、長老、名人の暮らしぶりや働いているところを見せていただきます。

中村：聞き書きをするにあたって大事なことは、相手の目を見てしっかり話を聞くということです。また、わからないところがあったら質問をしたりすることも大切です。聞いた話の大事なところとかは要点の部分は、メモとしてしっかりと記録します。また証拠として写真を撮ったりもします。最後には貴重な話を聞かせてくれたので、敬意と感謝の気持ちを込めてしっかりとお礼をします。聞き書きの準備ができれば、次はいよいよ調査の開始です。

川上：聞き書き調査の実施は1年生の調査員を募集し、1班4、5人の班を五つ作り調査しました。長老や

名人宅を訪ねて、夏休みの8月4日、5日の2日で18名の長老や老人宅を訪ね聞き書きをしました。この写真のおじいちゃんは運送業や映画館の話、おばあちゃんは犬の話をしてくれました。はじめて家に訪れて聞き書きをするのは、とっても緊張しました。2回目からは少し慣れて、楽しく聞き書きをすることができました。聞き書き調査中にはICレコーダーに名人や長老の録音ができているというハプニングもありました。9月には、同志社女子大学の皆さんとの交流もありました。

豊田：聞いて、手帳などにメモした話をパソコンに書き起こす作業をおこない、それから書いてないような場所や施設などを地図に落としていく作業をおこないました。聞いた話をもとに、赤木名地区を歩いてまわりました。この写真は前田川上流と、友恵神社という場所です。友恵神社とは、前島友庵という亡霊を退治した人を祀っている神社のことです。いろいろな場所を歩いてまわった結果、赤木名地区には歴史の風情を感じさせるものがいまだに多く残っているということがわかりました。僕たちは今、歩いてまわった場所を地図に落としていく作業に取り組んでいます。僕たちのこういった作業はマスコミにも取り上げられました。

川上：今後の課題としては、書き起こしの資料を整理したり、聞き書きから得た情報をもとに現地調査をおこない地図を作成していきます。そして問題点として挙げられるのは調査人数の募集やいつでも使える教室の確保などがあります。本年度初めての活動で戸惑いながらの調査でした。調査を通して昔ながらの地形や伝統などを肌で感じることができ、とても貴重な体験となりました。以上で報告を終わります。

中山：はい、ありがとうございました。今の感想で、教頭先生何かありますか。補足か。突然ですが、今日大島北高校のほうから池之上教頭先生が見えております。

池之上譲治：こんにちは。大島北高校、教頭の池之上と申します。中山先生が3月に学校にきて講演をしてくださいます、その際に大島北高校にこういった聞き書きをしてほしいので、聞き書きをしてくれる人を募集したいというお話があって生徒に声がけをしたところ、この4名の生徒が快くやりますということでした。今もありましたように夏休みにまわったり、9月でしたか、同志社女子大学の聞き書きのサークルの生徒との交流とか生徒たちもとても楽しみながら、この島のよさというものを再発見して視野が広がって行って、とてもいい活動だと思ってます。これからも頑張りたいと思っております。どうかこれからもよろしくお願ひします。

話題提供：シマ学から学び活かす活動として

中山：はい、ありがとうございました。それでは私から報告させていただきます。

先ほど報告のなかでたくさん出てきましたけど、いつも我々がやる時にシマ学のなかから学んで活かすっていうこと、この活かすっていうところ一番大きな問題になるのかなと思っております。このなかでは新元さんが観光、具体的な取り組みをやっていて、着地型観光っていうことの言い方をしております。今度それを地域から世界へということでも環境を含め、地域から世界に向けて文化遺産を活かしたまちづくりって、えらい大きなタイトルをつけております。こういったシマ学を通していくと、やっぱりまちづくりまでつながっていくんだってということなんです。

奄美遺産。今取り組んでいるのは、奄美群島文化財保護対策連絡協議会っていう12市町村の担当者、文化財保護審議の先生方と一緒に、自分たちのシマ学を通して集落遺産から市町村遺産、市町村遺産から奄美遺産という地域の方々が認定されたものを島人で認定した奄美遺産にしていく取り組みです。それと連動してやっぱり地域の人たちが取り組むということは、ある意味では地域コミュニティとしての捉え方になりますので、ここでシマ学をやっていくと世界遺産につながっていくんだということも含めてそういう視点で取り組んでいるところです。

ケンムン（奄美に棲む妖怪）が出ました。これはケンムン村のマスコットとしてケンムンになり

ます。赤木名のほうでは文化的景観っていうものを取り組んでいます。文化的景観っていうとやっぱり同じように地域の風土っていうか生活、自然との関わりっていうものですね。これは文化財の体系です。この6つが有形、無形、民俗、記念物ってあってその5つ目に文化的景観っていうのがあります。文化財の分類枠であればこういうふうな捉え方になっているんだけど、我々のほうはこの点をもう少し緩やかに、そして我々が楽しみやすくするっちゅうことで、それまとめたのがこういった建物から植物から、そしてケンムンの出るところから味や香りのするところまで、自然と人との関わりのあるっていうものを全部ひっくめてこれをシマ遺産、シマ遺産から市町村遺産、そしてそれを奄美遺産にもっていくっていう取り組みです。すると、島人が人と自然との関わりっていうものについてより具体的に、「わきゃ（私たち）が大切にしたいもの」っていうものをやっぱりより具体的にみせられる。また知ることができる。島を誇りに思うっていうことですね。さっきの6分類枠は大変貴重なものだから指定して国の文化財にする、県の指定文化財にするっちゅうことですが、これは「わきゃ」の視点で見てそういった味や香りのするところまで含めて大切っちゅう思うことを活かしていこう、守っていこうと。守るだけではなくて畏れ敬い守り残し伝えたいっていうことで島人達の独自にやっちゃおうという分類の仕方です。

先ほど菊地先活からありましたように、地域の人たちが地域のをどういうふうな宝にしているか、地域の人たちが大切にすることが、またいろんな文化財も観光にも活かされるんだっていう、いろんなところに活かされていくっていうことになります。こういう方向性で具体的に取り組んでいこう。ケンムン村が古道再生してつくっている看板なんかもその一環になりますね。集落遺産の捉え方と文化的景観もほとんど全く一緒なんですね。だから田畑先生が植物だったら植物だけ、泉さんが食だったら食だけじゃなくて、その集落のなかでこういうところで食材にするものがどこにあるとか、そしてこういう植物は建材にも使われるし食用にも使われるし下駄とかいろんなものにも使われる用材としても関わる。人々との関わりは、この集落のなかから周辺の山まで含むんだっていうことなんですね。

名瀬でやっているシマ学で、小宿を歩いたところです。どこにいてもその道の長老とか 専門の方々がいらっしゃるんで、こういう話をよく聞き、シマ（集落）の宝をまた見させて下さいっていうと、「わきゃ宝ものは〇〇ど」って必ず言うんです。1つ1つ歩いていくといっぱい出てくるんですね。小宿のほうでは小学校のほうから神社のほう、そして屋敷のなか等は全部伝統的なものがあった。ここは昔こうだったとかっていう場所も出てきました。こういった宗教建築もそうです。神社であり教会であり墓地でありシマ学のほうでは、必ず見えていますよね。墓地を見ると、私だけじゃなくて皆さんが生きてるんじゃないかなと思うんです。これは山川石だとか加治木石だとかこういう墓石がある、いつごろかっていうと、だいたいこれは江戸期、これは明治・大正とか昭和とかっていう、ほんと、シマ学の皆さんはだいたい墓地を見て、ああ、ああというふうになってきました。

これは赤尾木と大笠利で田畑先生と泉さんが、長老たちを対象とした聞き書き。90代ぐらいになると、流暢な標準語が使えないんですね。「アンカリ、シマグチというから、シマグチとまた聞かんといかんちゅうことになるチョ。うらんや、シマグチわかりしょらんなって」（皆さん島口だから島口で聞かんといかんということです）いうから、たどたどしく標準語と島口でやってんたりしてね。シマにいくとこういった長老たちがたくさんいるのと、長老たちを集めると、それ聞くのがまた大変なんですね。だからある程度分散したほうがいいのかなっちゅうにも考えております。宇検は14集落あって私がやってから4年、その前に高橋一郎さんが初めて取り組んでいて、宇検が一番早く取り組んでたんですね。もう2巡して、今度は自分たちで報告発表したりっていうことも。去年、文化祭で報告をされて非常に好評を得ております。そしてその成果を今度は集落の大きな看板にし

て、もう既につくっています。こういった成果が集落の入り口に看板としてあるって、非常にいいな。ということで、笠利の産業振興課も、あれと似たようなものを頑張ろうってということで今、やっております。1つ1つ、聞き書きのなかから、いろんなところに活かされ、観光にもそして活かされてくるかっていうことなんですね。

台湾の人たちを呼んで、イノシシサミットもやりました。ケンムン村の皆さんがイノシシサミットのときに聞き書きをやりました。向こうの山では、猪穴がある、猟師さんからまた聞いたりしました。やっぱり猪穴っていうのが単なる猪穴だけじゃなくて、どういう場所にあったのと、人と自然の関わりということが分かります。こういった急峻な山、イノシシの通る道という、そういったものを熟知しないとだめだということなんですね。猪穴の大きさもあって落ちた場合どうするかとか、なかがプラスチック状になってるのはどういうことか。1つ1つが全部、人と自然との関わり、そして食料にするためのイノシシをとるためのこの山の大切さが現れてきます。

赤木名の代官屋敷の現在の当主であります寺尾正徳先生ですね。行くと必ず親切に説明してくれるんです。元仮屋跡代官屋敷なので、屋敷の家自体は新築して変わっていますが、屋敷と屋敷の構えが、ちょっとしてみると知覧の武家屋敷に似ていませんか。やっぱり奄美に奉行所が置かれて、そして代官が置かれたっていうことは、大笠利のほうに奉行所、そしてこっちの赤木名のほうに代官屋敷がある。この段階で今まで島ではなかった都市機能が置かれるわけですね。道路が整然となって、そして代官がくるのでやっぱり薩摩の影響を受けたこういった庭づくりが、赤木名の場合は特徴的になります。こういう庭、こういった庭木を写して後ろの山も取り込んで屋敷における借景の見方なんですね。後ろの山もバックとして見立てて手前の盆栽をつくっていくんだって。これは薩摩の武家ではやったのが奄美でもこういった取り入れがされているっていう事例です。そしていくとたいがいイヌマキが多いということが分かってきました。田畑先生は、いろんな要素があるんだけど、こういった武家屋敷とか横目役所跡、そして与人役所跡とかって役所跡がこういったイヌマキが多いっていうのがわかってきましたね。イヌマキが多いっていうのは、薩摩の影響を受けた庭づくり、屋敷づくりがあるんだっていうことですね。地域によって1つ1つこうしてよく見ると、「あれおかしや」っていうのが1つ1つわかってくるっていう事例です。

笠利地区は29集落ありますが、万屋、宇宿ともに崎原、宇宿校区の皆さんが調べたら、どこの集落でも龍郷でも宇検でも名瀬でも全部おなじですが、字名に出てない呼び名があるわけですね。呼び名を地図に落としていくと全部地域の呼び名があって、昔はあそこはなんて呼んでいた、あそこにはよく磯煮があってあその磯煮が一番おいしかった。井戸は生活用水で家庭菜園とお風呂を沸かすときに使っていたという、そういった違いもあります。あと遺跡が立地する場所っていうのもその近くであることも見えてきます。これは聞き書きのなかで、「このときに一番おいしいものはなにか」、「いつごろどっからこの山のものをとられるか」、こうして季節的なもの、とれる食材をよく調べていくと、シマでは四季とか季節感ってあんまりないって言われるんですけど。竹の子が出る時期とかゆりむんが、寄って来る時期とかっていうのもある。海のも山のも含めてこれだけやっぱり季節感があるんだっていうことです。この時期にどういったものを料理して食べてるかっていうのと、年中行事のなかでも正月食べるもの、そして8月のとき食べるものとかっていう違いが当然ある。大きく違いが見えてきたのは、正月っていうのは豚料理ですよ。正月のために島豚を養い、正月ば迎える。シマ豚を大切に育てておいしく食べる。それを塩豚にして田植えから稲刈りの時期までもたすっていうようなこれから夏になって暑い日々が続くこれ夏バテしないように、ロッカツヤギ（6月に食べる山羊）を食べて力つけらんばちゅうことでロッカツヒンジャちいう。旧の6月になるとヤギを食べる。それが肉を食べる最後の月になる。それから海から食材ってニャー（貝）とイユがとれるから、魚主体になってくるわけですね。大きくそういった山のものや、豚を食べる

ものからイノシシ、豚、最終的に食べ終わってあとは魚のほうが中心になっていくってそういうそういった大きなサイクルもあるわけですね。島人がうまく、そういったものを利用していったってということ。それを具体的に表にしちゃうと、集落があって集落から今度どれだけ離れてるところまで利用してるかっちゃうと、モザイク状にばらばらって、奥まで使ってるっちゃうことがわかったわけですね。奥まで使ってるちゃうのは、山奥まで全部使ってるちゃうことです。今日はケンムン村の皆さんたち、猟師さんも泉さんもいらっしゃいますが、シシとりに行くときはこの山、あの山まで行くってことは、ほとんど人が入ってるっちゃうことなんです。それも毎日入るんじゃなくてシシの時期だけ入る、キノコがとれる時期だけに入ってるってことでモザイク的っていうのはたぶんそういう季節に応じて入って行くってということ。こういった深い山からこの集落の海までずうっとこれ資源を利用しているっちゃうことなんですよね。利用しているということが具体的に聞き書きのなかで出てくる。具体的に遺跡のなかで出てきたものを見たりすると、島人っていうのは深い山から海まで利用しているということがわかりました。港があってトネヤがあって仮屋があってっていう全部この集落空間っていう集落の1つの型ができあがるっていうのと特徴が見えてくるってということなんです。

宇検はカミミチが14集落全部あるわけですが、笠利でも、カミミチが途切れ途切れあるんですね。北部のほうは早くなくなっちゃったちゅ思ったんだけど、山の奥にあるってということがわかってきました。一番古い地図から名瀬のまちを見ます。『琉球寫真景』っていう名瀬のまちを書いた絵図があって、代官仮屋跡が全部ここに整然と並ぶ名瀬の港ですね。この絵と今の絵をまた並べると、こういった仮屋が置いてあって、与人役所があって、観音寺墓地があってという、こうふうな関わりになる。こうしていくと名瀬のまちっていうのもそんなに大きくは変わってないなど。今のまちとはあまり変わらなくて、やっぱりもともとあったものが、たどられるねってのがわかってくるんですね。

そうすると墓地の位置と与人役所とか、集落の空間がよくわかるってということになります。あと皆さんの大好きな赤木名墓地、この墓地を赤木名の墓地をまず1つ基準としてつくっちゃおうってことでした。この墓地調査のために冬の寒い時期も暑い時期も約600の墓地の調査をした。それで、これ江戸期の形、あ、これ大正の形だっていう、その特徴っていうのが見えてきたわけですね。そうすると島人はいつごろから墓石を持ち始めたかといえば、比較的新しいのです。当たり前だけど新しいということがわかったわけです。それ以前は洞窟葬であるとか、風葬であるとかだったので、そして墓石を持ち始めるってのは1700年代になってからってことがわかったわけです。これも薩摩の影響ちゃうことになるわけですね。薩摩の影響で代官さんが墓石をここに置き始めたらだんだん、島役人から置き始めて、昭和の段階になるとこのへんが御影石が入って、急に40年代から御影石がガンと急に増えていった。た墓石っていうのが1つのステータスってことにも考えられるってことになってきたわけですね。1つ1つ調べていくと、こういうふうにして墓石の変遷とか、墓石はいつごろからこういうふうに来たねってのがわかってくる。この集落ではこうだけど、今度はこの集落だ、このへんから始まった。御影石はこのへんから大きくなったねってのは、集落によってもそれが全部違うってくるってということなんです。死亡年月日まではっきりわかるので、1つのものさしになるんですね。非常に貴重なデータです。これを宇検では今、墓地調査も含めて、こういったデータを作成しようってことにしております。

さっき言った江戸期のものとか、赤木名の事例です。江戸時代に書かれている地図、全く今と一緒ですね。変わりません。ほとんど家がなかった部分ですね。家がなかった部分、今家が建っていますが、この部分が江戸時代によく栄えていたのが赤木名になったね。ここに与人役所や横目役所、代官屋敷等々があって、こういうふうにならざるまじりあって、都市機能っちゃうのが置かれ始め、奄美ではじめて都市機能ちゃうのが置かれた。これがまた大熊にすぐに行ったり来たりということになって、最終的に名瀬のほうに行っちゃいますが、初期の都市機能がここに置かれて、

流通往来の島っていうふうに言われている。

北高生が今回頑張ったのはこのなかの18人だったですかね。長老たちの聞き書きをしたら、こういったシマ学のなかにおいて、北高生を見た地図がこういうふうにでき上がっちゃうということになります。さらにシマ学から何を狙うかってことになると、こういったシマ学の大切さが、世界自然遺産とも関わりもあるんだってことが、岡野さんから話してもらえるとと思います。奄美は環境文化型の国立公園から世界自然遺産に関わることになるので、シマ学はやっぱり世界に通用するものだってことなんですね。こういったものを観光にも活かさないといけないんじゃないかと思います。

具体的には何を言いたいかちゅうと、あくまでもシマ遺産、シマ集落がベースで、そこから奄美遺産になって日本遺産になって世界遺産になるんだと。だから世界遺産の取り組みっていうよりも、シマ遺産から世界遺産になっていくと考えていく。地球研の菊池さんがおっしゃっていたのと同じような取り組みにつながっていく。こういうふうにして地球研も我々のあと押しをしてくれる、協力していただける、指導していただけるっちゅことにもなるのかなと思います。こういったのもまちづくりまでつなげていくとこういうふうになるだろうということになります。だから今回は、シマ遺産から学んで環境と世界遺産につながる資料蓄積になればと思います。熱心に聞いていただき、どうもありがとさまりよーた(ありがとうございました)として終わります。

話題提供：世界遺産と聞き書き

岡野：皆さん、こんにちは。今年の3月まで鹿児島大学に出向でお世話になっていまして、そのときにこの奄美に何度も通わせていただきました。皆さんにいろいろお世話になりました。ありがとうございました。東京に戻った今も、いまだに奄美のことが気になっていまして、世界遺産を迎えるにあたってもいいかたちに、何かやっていく方法はないかなということをしていると思います。菊地先生がいる地球研のプロジェクトでも一緒にやらせてもらって、今日もこういう場を設けさせていただきました。

世界遺産については、皆さんご存じのことと思います。2013年、世界遺産の候補になりますということで、新聞でも大きく報道されました。世界遺産というのは、文化遺産、自然遺産、複合遺産という3種類がありまして、世界でそこにしかないというか、世界でナンバー1のものがある場所が世界遺産ということになっております。今、世界で1,000件を超えるものが世界遺産に登録されております。文化遺産のほうが数は多くて、自然遺産のほうが数は少ないです。文化遺産が多いのは、国とか地域それぞれの社会のあり方が違えば文化も違うということで、世界中に多様な文化があるということです。一方で、自然は地球という1つのなかで、それには国境なく、山なら山のナンバー1、海なら海のナンバー1みたいに選ばれるので、非常に数が少ない。200件ぐらいです。

世界遺産に登録されるには、3つの基準があります。1つ目は価値があること。世界中のどこにもこういったものはないですよ。それが評価基準を満たしている。1番目が価値です。2番目は、完全性とか真正性とか言いますが、その価値あるものが、価値が壊れてませんよと、ちゃんと残ってますよということです。文化遺産、建築物であれば、昔のままの材料で使われてますよということです。3番目は、その価値あるものが、将来にわたって守っていく仕組みがちゃんとあるということです。この3つが揃って、初めて世界遺産に登録されることになっています。将来にわたって守る仕組みには、法律で価値が壊れないようにガードする、規制をかけるということが必要になってきます。奄美で世界遺産の前に国立公園にしましょうというお話をしているのは、世界遺産になる前に、そういった将来にわたって守る仕組みをちゃんと作りましょうね、ということなんです。それから、地域の方の理解や協力が得られるということが非常に重要です。

奄美は琉球と併せて世界自然遺産の候補地になっております。自然のいろんな成り立ちのなかで、

非常に特徴があると、世界の代表的な例があるということを証明するものが世界自然遺産になります。奄美の特徴は、昔、大陸の一部だった場所が、地殻がここで海ができたりして切り離されて島になって、昔の大陸に住んでいた生き物たちが閉じ込められて残っていることが、大きな特徴になっています。代表的なものがアマミノクロウサギです。ニホンノウサギと全然、体型とか形が違います。よくわかるのはこの足ですね。ノウサギはピョンピョンピョンピョンと非常に力強く跳ねるんですが、クロウサギはそんなに後ろ足が発達しなくて、ピョコピョコピョコピョコ歩くような感じです。いろんな生き物がウサギを食べますが、そういった競争すると、クロウサギが負けちゃうんですよ。ほかの世界の場所では、そういった食べられたりする競争から負けた結果、こういうクロウサギというタイプのウサギは、地球上からほとんどいなくなってしまう。奄美にはそういったウサギを食べる大きな生き物がいなかったの、タイムカプセルに保存されたようにクロウサギが残っている。これが世界的にも非常に珍しいですことをあらわしています。このように、ほかの地域で昔広くいた生き物が取り残されているものを「遺存固有」とちょっと難しい言い方をします。奄美は古い大陸の生き物を乗せた方舟というふうに言っているわけです。他にも、いろんな絶滅危惧種と呼ばれる、数が少なくなっている生き物たちが、奄美、徳之島、沖縄本島北部、それから西表島にそれぞれ違うかたちで生息していて、グループとして世界的に価値があると考えています。そこが理由となって、世界自然遺産の候補になっているんです。

一方で、奄美は非常に伝統的な祭祀とかお祭りが色濃く残っていて、こういった特徴も併せて持っているのが、奄美の非常にいいところだなあとと思っています。

ではなぜ世界遺産なのかという話ですが、奄美群島は世界的にも特異で貴重な自然が残っていて、さらにその自然を背景として独特の文化が育まれている。ただ、自然を守る仕組みは不十分です。先ほど言ったように、世界遺産になるためには国立公園のように規制をかけて、森が守られるという状況をつくらなきゃいけないんですが、それは実は奄美にはほとんどかかってなくて、森のほうは守られてないというようなかたちになっています。もう1つの理由として、経済的に長期低落傾向で雇用が減ったり人口減少が続いているという地域の状況もあって、こういった地域にある資源を活かした個性化、それから地域づくりが求められています。そこで、世界遺産をうまく使ったらいんじゃないかと思っているわけです。その地域づくりの例として屋久島の例をお聞きになったことがあるかもしれません。世界遺産は世界で1番だというような場所ですので、観光地としての魅力は非常に高まります。世界遺産になっていくと、観光客が2倍とか、そういったかたちで伸びてきています。典型的な例として、屋久島にはガイド160人ぐらいいらっちゃって、こういった自然を紹介することで仕事をしています。そういったこともあり、人口の減少が止まって、屋久島を非常に気に入って移り住む人とかも増えている状況があります。もう1つの大きな特徴として、屋久島は日本中の誰もが知る島になったということですね。昔は「屋久島出身ですよ」と、なかなか自分で言えなかったのが、今は「屋久島出身です」と言うと、「いいところから来ましたね」と言われると。そういった、誇りのようなものにもつながってくる。地域を元気にする力があるんじゃないかと思っています。

ただ一方で、人気が出すぎちゃって山が荒れてるという話も、皆さんよくご存じだと思います。また、せっかくたくさんのお客さんが来ていますが、農業生産額とか作物をつくっている面積は減ってるんです。せっかくお客さんが来て、一部の観光だけに特化したような地域づくりになってきています。こういったところは非常に大きな課題になっています。そういったなかで、屋久島でも観光の効果を地域に広く広げようということで、里のエコツアーというものが開催され始めています。地域のお住まいの方が観光客を案内をして、縄文杉に偏りがちなツアーを分散したり、話しながら地域のお土産物をうまく売ってこうというように始めています。

世界遺産は、知名度が上がって観光客が増加したり経済的仕組みが非常に推進されますよということ、地域の自然が世界に認められることで大事にしましょうという意識が上がっていくことにもつながります。世界遺産を考えるとということ自体が、地域を見直して将来を考える機会にもなって、そのためにいろんな人を集めて議論が活発になるという、そういった効果もあります。実際、今、奄美でもいろんな方が将来について考える1つのきっかけにはなっていると思っています。もう一方で、利用者が一部の場所に増加すると自然が損なわれたり、あるいはうまく地域づくりと一緒にやっていかないと、世界遺産がブームに終わる可能性があります。実際、屋久島以外の世界遺産の地域は一瞬増えましたが、観光客は減ったりしています。ただ単になっただけでは、あまりうまくはいかない。あと、特定の場や価値のみが注目されると波及効果は小さい。縄文杉だけが世界遺産のようになると、そこだけに注目が集まって周りの農業とか水産業とかに波及効果がないという問題がある。また、世界遺産になって守らなきゃいけないとなると、今までの暮らしが制限されるとか、地域のことが地域で決められなくなるとか、あるいは、どうせ自然だから集落には関係ないとか観光にしかメリットがないんじゃないかって思われている地域の方もたくさんいるのかなというふうに思っています。こういった課題と不安をどう払拭していくのかというのが、これからの奄美が世界遺産を目指すときに重要なことだろうと思っています。

奄美の特徴というのは、手つかずの自然じゃないってところだと思います。手つかずの自然じゃないのに、あんなかわいいクロウサギが生き残っているというのが、僕としては興味深いです。奄美では、森はこれまでもいろいろ利用されてきました。薪に使ったり、あるいはパルプ材に出したりとか、いろいろ使われてきた。家を建てたりとか、いろんな利用をされてきた。そんななかでも、あのような弱いタイプのウサギがこの島で生き残ってこられたっていうのは、なんかいい話じゃないですか。人が使いながらも、弱いウサギが残っている。そういったところに、僕は、今の世界の環境問題とかを解決するヒントがあるんじゃないかと思ってるわけです。人がうまく使いながらも生き物と一緒に暮らしてきた。そういったことをうまく発言、発信していくことで、奄美の世界遺産っていうのが、より世界的にも注目を浴びて、あるいはいいものとして日本中にも発信できるのかなと思っています。

こういったクロウサギのような弱いものが生き残ってこられたのは、ちゃんと地域の方が自然を畏れ敬いながら、持続的に利用をしていく、うまく使っていく、環境文化という言い方をしますけども、そういったものがある。それと、自然そのものの再生力も大きかったので、こういった生き物たち、それから文化もここにしっかり残っているんじゃないかなと思っています。こういったことをしっかり調べてアピールしていくことが、奄美らしい世界遺産であるし、それをうまく経済活動につなげていくことが地域全体の元気につながると思っているわけです。

そこで重要になってくるのが、地域の価値をもう1回地域でしっかり見直していきましょうよ、っていうことです。自分たちで見つけて発見して記録して、そして打ち出していく。地域の人たちの言葉で語るっていうことがすごく大事なんだろうなと思っています。地域の自然は地域の人が引き継いできたもので、守ってこられたのは皆さんなんですよね。皆さんの声で語るということが、この地域の価値をしっかりと伝えていくことになるんじゃないかなと思っています。そういった意味で、地域のこれまでの歴史、文化も含めて自然というものをトータルで見っていくことはすごく重要なんだろうなと思っています。

世界遺産のような保護地域の観光が何を指すかっていうと、もちろん1つは経済的チャンスを増やすということです。人が来て、食事をしてもらって宿に泊まってもらって、お土産を買ってもらう。それがちゃんと地域の自然とか文化遺産の保全につながらなければいけないし、地域の生活の質の向上にもつながらなきゃいけないので、それをトータルで考えていく。そのために、地域の

環境文化を見直すのは、とても重要だと思っています。皆さんが取り組んでいらっしゃる奄美遺産がそういったものにつながるんじゃないかと、僕はすごく期待をしています。うまくまとめてかたちにして、あるいはプログラムにしていくことで、世界遺産をより活かすことにつながるんじゃないかなと思っています。1番聞きたかったのは、高校生の皆さんのお話だったんですが、遅れて聞けなくてごめんなさい。非常に悲しいです。こういった動きを地域の方がされていることが、非常に素晴らしいと思っています。これは本当に、新しいかたちで世界遺産というものをちゃんと地域のものとして活かしていく、とても大事なものだというふうに思っています。

聞き書きについては、菊地さんからお話があったと思います。そういった環境文化をうまく活かして、観光につなげていくことが大事だろうと思っています。先ほど言ったように、人が暮らしていろいろ利用しながらそういった弱い生き物たちがちゃんと生き残ってきたということは世界に誇れることだと思います。世界が奄美に学びに来るといったような感じで僕は考えています。そういったなかで、どういった観光に仕上げていくかということなんですが、あんまり大人数でドカドカ山のなかに入られても困りますので、そういった大人数は周辺の場所にそれ用のちゃんと場所をつくって対応するのがいいと思いますし、中人数ぐらいが集落を回って、集落のなかでいろんな自然とのつながりが残っていますので、集落を見せることで自然も見せるというようなことがいいだろう。そこには、聞き書きとかで、あるいは奄美遺産でまとめられたデータが生きてくるんだろうなと思います。少人数は森に入っただいて、地域の人が大事にしてきた森ですから、大事に使ってもらおうということが大事なのかなと思っています。人と関わって観光することによって、地域の伝統工芸とか農作物とか豊かな食文化などを合わせてうまく説明することで、総合的な地域づくりにつながっていくのではないかなと思っています。

先ほど、屋久島で観光客が増えて地域経済がうるおっていますが、ほかの世界遺産は減ってしまったという話をしました。なぜ屋久島がずっとお客さんが増えてるかということ、縄文杉という往復10時間かかる、なかなか普通の人では行けないような場所に、ガイドという仕組みをつくることで商品化に成功したんですね。誰でも行けますよ、っていう売り文句になった。本当だったらちゃんと準備をして練習をした人が登る場所だったんですけど、ガイドを付ければ、初めて山に行きますという人も連れてってくれる。その仕組みがつくられると同時にお客さんも増えているんですね。新しい観光のプログラムとして成功していることが、世界遺産がうまく組み合わせられて人が増えているという状況なんですね。だから、奄美が世界遺産になって、それでああよかったよかったというのでは、たぶんまたすぐすと落ちる。そこに魅力的な、何か新しい奄美らしいプログラムをつくるのが、持続的に続いていくことなんだろうなと思っています。もうすでに試みで、住用のヤムランドのほうで島歩きのガイドをされていまして、こういったことがうまく組み立てられていくと、新たな魅力を見せる商品として活用できるのかなと思っています。

奄美遺産が世界遺産につながるという話をされたと聞きましたが、もともと世界遺産という考え方は、世界中に、あらゆる地域に遺産はあるんだと、それをちゃんと守りましょうね、というのが目的なんです。そのなかでも、世界全体でみんなが助け合って守っていくものを、世界遺産リストというものに載せて守りましょう。基本的には遺産は各国が守る義務があり、それを守っていくなかで選りすぐりのものを世界遺産委員会が認めて、それは何かあったときに、その国だけじゃなくてほかの国も一緒に助けましょうねっていう仕組みなんです。条約にははっきり書いてあるのは、世界遺産にならないからといって価値がないとは言ってはならないと書いてあって、基本的にはすべての国がちゃんとそれぞれの地域の遺産を守っていきなさいということになっています。本当に大事なことは、その地域、あるいは国が、自分たちのところにある遺産をちゃんと確認をして、それを大切に守っていくということを決めるということです。それがあって初めて世界遺産というも

のが成り立つわけです。奄美の場合は、まずは集落から、自分たちの大切なものを見つけ、それを守っていき、それを市町村遺産にして、奄美遺産にしていく。それが国の遺産になって、それが世界遺産の1つの要素として生きてくるといふ。こういった仕組みが奄美ではできているというのが、僕はすごい素晴らしいことだと思います。そういったところの1つ1つに地域の皆さんが関わって選んでいわれている。なるのは自然遺産かもしれませんが、そのコースのなかに、人であり暮らしであり歴史であり文化が入っていることが、とても重要だと思っています。そういったかたちで進められてる奄美の取り組みを、非常に応援したいと思っています。

中山：ありがとうございました。シマ学がやっぱり世界の宝になる、シマ学から世界遺産につながっていくんだっていうことが、私の単なる思い込みじゃなくて、皆さんがやってきたことがすごい重要なことなんだというのが、何かわかってもらったかなと思います。何かわかったんだけど、これは継続しないといけないということです。これで終わったからつって、シマそれぞれ調べたからいいかじゃなくて、次のステップってのがあるので。行政じゃなくて地域住民でやってるちゅうことがすごいなことだったんですね。ケムン村であり、公民館講座、公民館、教育委員会サイドでやっているんです。徳之島、与論まで含めれば300近い集落があり、全部独自性があるちゅうことです。今日は瀬戸内と大島本島の皆さんだけだけど、徳之島も永良部も与論も含めて、奄美群島で全部が取り組んでいかんば。ナマ聞き書きをしなければね。そういった日にちはあと2年しかないちゅう思うわけ。

住用のヤムランドと同じように渡辺さんのほうで頑張ってるので、その事例を聞いてから、高校生のまた追加分、皆さん高校生に聞きたいばかり言っていますから。そういうことで、鼎さん、よろしいですか。あと、大人が出るんじゃないかと、若い世代が引き継いでいくためにも、それも与論まで含めて高校生のなかで取り組んでもらえば、その高校生大会ちゅうのもあっても非常に面白いんじゃないのかなと思います。

話題提供：鼎丈太郎

鼎：こんにちは。瀬戸内町立図書館・郷土館、埋蔵文化財の中山さんの後輩に当たり、学芸員をしています。鼎と申します。出身は笠利なので、久々に戻ってきたところです。今、瀬戸内町のほうでシマ学のような、奄美遺産のようなものをやっておりますので、それを紹介します。瀬戸内町では、奄美市と同じように、文化庁の事業で文化遺産を使った観光振興地域活性化事業を前年度からやっております。観光振興ということだったので、ネット、スマホでも見れるホームページをつくって、瀬戸内町の文化遺産を何でもかんでも入れ込んでしまおうというのが、これになります。目的は、瀬戸内町の各シマジマにある大切なものを残していきたい。そこにしかないものをシマの自慢、ここではヒギヤジマンとか呼んでたんですが、として残して発信していこうという、そういう目的でやってきました。

ホームページのトップページになります。いろんな項目が見れるように、あとは更新されたものが見れるようになっています。大きくは島の時間として、島の年中行事や生活などを記録したものを載せているページ。瀬戸内は56の集落がありますので、その56集落の紹介をするページ。自然遺産ということもありますので、野生生物、鳥、あとは海の生き物も含めて、島の自然のコーナーをつくってあります。島の食として、いくつかのレシピと、瀬戸内の「さしすせそ」がありますので、その「さしすせそ」の紹介。瀬戸内町文化遺産活用実行委員会という実行委員会を立ち上げ、23年度、24年度、25年度、3カ年間、いろんな体験講座等を行いました。その講座の資料や記事。最後に映像として残したものの、あとはラジオ放送もしてましたので、今もやってるんですけども。私の声を車か何かで聞いたこともあるかもしれませんが、そのデータもホームページで2カ年分聞けるよう

に入れ込んであります。

地図のなかにアシャゲとかトネヤとかカミミチとかそういったものを入れ込んであります。あと、観光も考えていましたので、自動販売機とかトイレ、あとはバス停、そういったものもここに入れ込んで見れるようにしました。観光に来て意外と困るのは、飲み物がどこにあるのかわからない、お店がどこにあるのかわからない、バス停がどこにあるのかわからないという声もあったので、そういったものもここで見れるようにしました。瀬戸内町の埋蔵文化財のマップにも飛べるようにしました。自然のなかでは今の時期から始まるクジラとか、ちょっと普段、世界遺産とかも含めて海の生き物とかはなかなか見る機会が少ないですので、そういった海の生き物とかも入れるようにしてあります。映像遺産としては、ネット上で見れる動画と、あとはラジオの放送を聞けるような部分も一部あります。ただ、長い映像に関しては、瀬戸内町の図書館であるとか奄美図書館で見れるようにしています。

緊急雇用事業で、3年以内とか、10年以内の企業さんに助成をして調査をしてもらったものがあります。こちらもいろんな聞き書きをしたものと、あとは写真とかもあるんですが、こういう小字名とか、あとは集落のなかにどういったものがあったのかというものを見れるようにつくってもらっています。こちらは瀬戸内町の図書館のほうで閲覧できるようにしてあります。この2つはもう事業としては終わったんですが、現在やっているものは、瀬戸内町内の埋蔵文化財調査です。本職なんです。そのなかで、戦争遺跡の分布調査も行っております。現在、カード化として、1つ1つの施設をカードと写真とデータに落としていくという作業をしております。これも、順次図書館のほうで見れるように置いてあります。一応、このホームページも含めて、できるだけ地元の方、デザインもホームページの構築も映像も写真も、すべてできるだけ地元の方をお願いをしてつくってもらいました。一応、このホームページの目的は観光と若い人への伝承ということもありましたので、そういったかたちで、若い人にできるだけ関わってもらいたいという思いで作りましたが、意外とまだ、地元ではあんまり使われてないのが現状です。むしろ、関西に行かれた方が同窓会で写真を使いたいとか。今日も古志大根、古志集落に二十日大根みたいな地元の大根があるんですけど、それを調べに来たい、これで見ただけで、っていうかたちで、どちらかというところ外からのことが多いです。一応、こういった流れのなかで、観光課のほうで島案内人というかたちで、シマ学みたいなかたちで何年もされているんです。地元の人が地元のことを観光案内することもやっていて、そこに私とかも協力をしています。

あとは、加計呂麻島で民泊協議会が立ち上がって、民泊をしながら戦跡を案内したりとか、農業体験、芭蕉の体験、そういったものをしようという流れも、今、生まれてきています。博物館のようなところなので、販売とかまでは手を出しておりません。どちらかというところ、その辺は地元の方に活用をしていただくという方向を考えております。もっと地元との連動が必要だなと今考えているところです。やはりホームページなので、個人情報とか、そういったものがすごく問題というところ、どこまで入れるのかというところが問題点になっています。駆け足ですけども紹介をさせていただきました。ぜひ見ていただければと思います。よろしくお祈りします。

中山：ありがとうございました。この資料を見ていいかなあと思うのは、みんな、このシマ、シマ学って言っていることです。先日、名古屋市立大学に、聞き書きをする大学の先生方が集まりました。地域の方々が取り組んでいる事例の報告がありました。そのなかでも同じようにシマに学ぶとかっていうのも出ていました。その帰りに、和歌山大学まで行って、尾久土正己先生、皆既日食のときに頻繁に来た先生のところまで行って、観光って何だ、シマ学の観光って何だろうかっていう話をしてきました。そしたら、尾久土先生も、シマンチュが学ぶことだよ、シマの人たちが学ぶことだよ、それが観光。だから、シマの人が学ばば、今、さっき丈太郎が言ったように、やっぱりこのシマに学びに来たいっ

ていう大学の皆さん方も、このシマに学びたいって来る、その学ぶ受け皿をつくるっちゅうことが大きな観光につながるのかなって、ヒントを得ましたね。住用のヤムラランドの新元さんがやっていることも、こういったところを地域資源を活かしてっちゅうところが学びになる。学びの島っというものも1つのキーワードだろう。ここ2、3日の名古屋から和歌山行ってきて、先生方とお話をしながら感じています。

先ほど岡野さんからもありましたように、こういったシマ学が大切だっということは、わきゃが(私たちが)学んで、資源をデータベース化していくことの大切さ、誰がデータベース化してそれをどう活かすのっというの、瀬戸内ではこういった取り組みをしている。1番よかったのは、図書館・郷土館がそれをホームページで流しているってことなんですよ。普通であれば、図書館、郷土館っというの文化財を守るってなるんだけど、そのホームページを活用してる、こういった博物館の機能を利用するっちゅうことが、大きな課題じゃろうと思っております。人がいないからできないっちゅうんじゃなくて、予算がないからできないっちゅうんじゃなくて、シマ学やってる人は全部こういう公民館講座でやっているのがあるので、今、皆さんが来ていただいてやってるのは、非常に行政にも大きなインパクトを与えるのかなと思っております。

先ほど、高校生が初めて取り組んだ事例、発表する前から拍手があったんです。高校生が前に出たときに。終わっても拍手でした。今日の主演は彼女たち、彼たちだと思えます。一言ずつ何か追加で。ここで聞いていて、この部分はとっても勉強になった、わからないところがあったっというの、1つずつ皆さん感じたことを、一言ずつお願いできたらと思えます。

そしてもう1つ紹介したいのは、こういう取り組みをさせていただきたいということがあって、農林水産省と文科省とあともう1つどこかあって、共存の森ネットワークっというの、全国の高校生100人を、全国から募集するわけですね。聞き書き甲子園っというのがある。聞き書き甲子園っというところに大島北校からも募集したら1人受かっちゃって、大島北校は聞き書きで甲子園に行っったっということになります。そういった、地域において頑張れば、やっぱり高校生の力っというのもすごいな。またお年寄りから継承していくっということもすごいなっというふうに思っています。始めてまだ何ヵ月なので、暗中模索の状態ですが、それで先ほどの報告のなかであったものを、苦労したとか、一言ずつどうぞお願いいたします。

何か、これまとめるためにいっぱい書いていたのがあったんじゃない？本人たちは今日報告するためにまとめるという作業をやっていて、私が10分か15分っという制限しちゃったのでかなり早く終わったので、まだ報告していないことがあるのではないのでしょうか。その辺を紹介してください。

■ 座談会

川上智香(高校生)：夏休みに行った調査で、書き起こしをする際に、方言がわからなかったり、方言の聞き取りが難しかったりしたので、自分たちも方言を少しでも本気で学べるようにしたいなと思いました。(拍手)

中山：われわれが答えたら、あんまり拍手はもらえないですけど。(一同 笑う)

今日はやさしい人たち。今日は高校生にスポットが当たって、すごくいいです。ありがとうございます。やっぱり方言がわからなかったっというところが、やっぱりポイントなのかなって。行ったところが80代、90代の方なので、標準語うまくしゃべれずに、方言になってきていてと、そのままの聞いたままをまた書き起こしてっというか、そうしたら、その人が一字一句言ってるっというのが伝わってるのかなと思えます。だから、そういったところは、どんなにすればいいよっというアドバイスか何か誰かございませんか。方言しゃべる、彼女たちにわからんところはどんなにす

ればいいとかっていう、皆さんからのアドバイスがあれば教えてください。勇気を出して今発言していただきました。いいですか、あとでそっと教えてください。あと何かありますか。

萩原千桜（高校生）：聞き書きをして学んだことは、昔のおじいさん、おばあさんが小っちゃいときは、山のなかへ入ったり、子どもたちだけで港へ行ったりしていたことで、今の子どもはあんまり体験できなかったことが、できていることがすごいなと思ったし、大島紬の歴史や昔の食べ物で、ヤギの血や内臓まで食べていたところがすごいなと思いました。（拍手）

中山：さっきヤギの話もしたり、小学生たち、中学生と遊びに行くフィールドが違う、範囲が違ってくるわけですね。そういった違いっていうのと、子どもと、本人たちがやってることの違い。ああ、昔ああだったんだね、こうだったんだねっていうことと、ヤギ、さっきもロッカツヒンジャ（6月山羊）は葉だって言ったんですが、そういった話が聞けたり、ヤギについて具体的に、ヤギのおいしい食べ方っていうのありますか、何か。泉さん以外に皆さんが聞いて。（一同 笑う）

自分たちのところには、こんな食べ方もあるよとか。この辺はフツ（ヨモギ）は入れないですよ。フツ入れるところあるんですか。フツ入れるところはないですね。塩味のところがあるんですね。あれ味噌味のほうは。あれ、味噌味が少ないんだ、開きのなかでも味噌味が塩味かっていうと、塩味が多いですね。味噌っていうのはつい最近入ったのかなっていうところがあるので。そういうふうにしてとらえていけるわけですね。さっきヤギの内臓まで食べたっていうのが彼女にとってはショックだったみたいです。昔はどうだったんですか、食べていたんですか。

男性A：内臓？わりと今でも食べますよ。（一同 笑う）

中山：やっぱりそれは、今でも食べるっていうのは、皆この世代になると当たり前なんだって。（一同 笑う）

あのときまではほら、目の前で屠殺してやってたから。今やっちゃいけないっていうことになってから、彼女たちはその段階では既にそういったのは見たことがないわけですね。そういった意味で世代間の違いっていうのはあって、前は当たり前だった、子どもたちはまだそういうところが衝撃なんだねっていうのが、それでまた行ってるところもまた学んでいくわけですね。聞き書きのいいところだと思います。

男性B：実際に25年ぐらい前までは、正月はやってよかったんですよ、屠殺場に持っていかなくても。

中山：うん。豚もね。

男性B：25年ぐらい前までだったかな。正月ワが。そのあとはもう駄目になったんですよ。屠殺場に持ってかなきゃなんないって。結局そのだから、屠殺場に持っていくと、何でも屠殺場に持っていくと、血がとれるわけ。チスイモンって言って、血の吸い物をするんですよ。タンパク質はほら、あっためると固まるもんだから、その血の吸い物がおもしろかった。ぎゃあぎゃあ泣かしながら。（一同 笑う）

中山：また過激な発言も出て。（一同 笑う）

男性C：牛のあの、海の釣りをする糸、あれを牛の血で染めたな、糸を染めた。

男性D：たれこみって言って、ヤギを、その肉を油で揚げてね、そのまま、煮る。それをたれこみをホジョする。たれこみって言って。

中山：北大島と南の宇検のほうとの違いっていうの、こうしてやっぱり島として違うって。今たれこみっていう新しい言葉も、中條さんはケンムンについても詳しいんだけど、そういった食生活についてもかなり詳しいんですね。各集落、集落で、さっき瀬戸内の事例も出たんだけど、こういった違いがあるから、シマ学やったあとに聞き書きをすることっていうのはよくわかることなので、非常に楽しい。こうした話を1つ1つ持っていくと、今わけがわからなかったっていうやつが結構あるんですね。高校生たちも、お年寄りから、当たり前のことちゅ思ってただけで、やっぱり衝撃的なものっていうのもあったり。ええ、昔はこうだったんだ、今はこうなってるのかって。あと、男子諸君のほうはありますか。

豊田翔（高校生）：聞き書きを通して、今まで以上にお年寄りの方と接する機会が増えて、たくさんのお話を聞いたなかで、やっぱり、島に住んでいるのに自分は何も全然わからないんだなと思ってちょっとショックだったんですけど、まだわからない人たちがいっぱいいると思うんで、聞いたことはちゃんと伝えていきたいなと思います。（拍手）

中山：学びたいってことですよね。学びですよね。何か、彼にアドバイス何かしたい方いらっしゃいませんか。

女性C：はい。アドバイスではありませんが、高校生の皆様の心意気に本当に。（一同 笑う）

方言も難しいかと思えますね。私まで方言こう、65歳で使っていますけど、私の娘、40歳ですけど、まったくノータッチです。わからないって言いますので、この若さでぜひ頑張ってください。（拍手）

中山：ありがたい励まし。はい、じゃあ。

女性D：こんにちは。ほんとに若い高校生の学びの姿に感心しました。私は加計呂麻の出身ですが、名瀬に来て長いんですけど、やはり、方言を使えないとかいうのはやっぱり家族構成にもあると思います。昔はもう、自分のじいちゃん、ばあちゃんと一緒に暮らしていて、何でもかんでも教えられました。じいちゃん、ばあちゃんからこうだよ、あだよ、きるもの話とかも、いろんなそのあれでも。方言もその頃は学校で使ってはいけないということで、私たちの中学校のとき。私は、2年前まで96になる母が元気で、私よりも元気でいてくれて、もう毎日方言でした。それで、今自分の子どもももう42になる女の子がいますけど、聞いてはわかるけれど話にはできないんですよね。だから私はとっても淋しい思いをしていて、それで今高校生の皆さんがそういう学びをされてる。私たちもこの名瀬には諸鈍会っていう会をつくっていて、そこでもう、私なんかよりか下のほうでは方言がなかなか使えなくて、今教えようかなあと思ってるところです。ですから、皆さんもおじいちゃん、おばあちゃん、おうちにおじいちゃん、おばあちゃんがいらっしゃらない方は隣の方とか、そういう方なんかとなるべく接してそういう良さをおおいに学んでください。参考になったかどうかわかりませんが。ありがとうございました。（拍手）

中山：ケンムン村って、やさしいおばさんがいるんですね。はい、じゃあ次の方どうぞ。

男性E：学校の部活だとかあるいは何らかのカリキュラムをなかに組み込んで、そしてその赤木名なら赤木名なの方で生きてる人たちをお願いをして、そういう勉強会みたいなのを組み立てることはいかがですか。考えていただけませんか。喜んで講師には行きます。（一同 笑う）

中山：ありがたいことです。ほんと、そんなにして、地元学でシマ学やっていて、高校生にはおれらが教えなきゃいかんかというのが出てくれば。今言った聞き書きサークルの皆さんが、発足し始めるんだけど、全員また地域の力も借りて、シマ学のところにもうちょっとこういう部分でちょっと話してもらいたいとか。あと、ケンムン村の皆さんもいらっしゃるんで、じゃあ今度現地に行こうっていうことであれば、もっといい、地域との関わりっていうのが。地域と関わるちゅうことだから、それは地域コミュニケーションになると思うんですね。そうしていければな、行政でできないこと、民間でできない部分ちゅうのができる。こういった初めての企画だけどそういったものにつながっていくのかなと思ったんですね。非常にいい話がいっぱい聞けました。なんか、さっきからヤギの話がどうかって言ってましたけれども。

男性F：話がそれたもんですから。（一同 笑う）

文化遺産について話すか、それか自然遺産について深く掘り下げるかと、ためになるんじゃないかと。食べ方のことについてやるのかなとか。今のような、学校などでクラブ活動などにそういう部活動などをつくっておいて、笠利は笠利、龍郷は龍郷、どこはどこってやって、そういうようなものの発表会なんかをしたりするのもいいあれじゃないかと思うんですね。人間がつくったものはやっぱり年月がたつと、自然になんでも滅んでいくでしょうがね。だから、これも文化遺産とし

て、ずうっと残していく何らかの方法を、行政とか学校とかそういうところでやらんといかんのじゃないかと。歌謡なども、今の島唄でも方言がなくなってしまうと、自然に理解することのできる人がいなくなり消滅していくんじゃないかと思うんです。

中山：確におっしゃる通りだと思います。だから島唄のなかにもやっぱり方言しゃべっていて、方言のふくよかさっていうか、標準語では伝えられない思い、なつかしやっていうのがあると思うので、そういったのも自然との関わりっていうのも大きいのかなと思います。そういうこともあります、具体的に今回は行政の方、大山さんが、今、字検の看板っていうのも含めて、住用のヤムラランドのものを、笠利でもやるんだってって頑張ってるので、ここで一言、笠利のほうも言わんば今日は寝れないと思うよ。（一同 笑う）（拍手）

男性 G：奄美市の笠利総合支所の産業振興課の大山と言います。今、中山さんにご紹介していただきましたとおり、笠利のほうでも、住用のヤムラランドの組織に影響を受けまして、笠利の観光振興っていうことを考えたときに、やはり組織的な取り組みが必要ではないかなと考えております。そのベースとなるものがまだないので、今年度そういった組織を立ち上げて取り組んでいきたいなど。また、笠利の観光振興計画にあたる歴史回廊のまち笠利観光プロジェクト計画書っていうのを昨年つくったんですけど、その際に、中山さんに協力もらいながら、笠利の歴史、史跡とか、そういった豊富な笠利の地域の特徴を活かしながらの観光振興ということで、取り組んでいきたいなと思ってます。また皆さんにご協力もらうこともあると思いますので、よろしくお願いします。（拍手）

中山：ありがとうございます。本当はつくった地図とか持ってきて皆さんに配るとよかったかもね。

男性 H：どうもこんにちは。年をとったせいか、少し皆さんの話、届きにくいっていうきらいがあるんでね、中山先生のほう、マイクがあればもっといいかなあと思ったもんですから、それと高校生の皆さんね、お話ししてスピーチするときは、やっぱりみんなが聞いてくれるぐらいの言葉をね、話してもらいと余計いいなあと思う。声に歯切れがない。ぴたあっと話すとね、やはり自分のそういう訴えたいことをしっかり話せるようにね、今日はマイクがないから、やっぱり通るようなね。ぜひこれからも発表するときは、せっかく出たんだからちょっと大きな声を出して、年寄りとかは特に、あ、年寄りだって。（一同 笑う）

スピードが速いとね、やっぱり聞き取りにくいんですよ。今日はお年寄りの方がおったら、少しスピードを落としてお話しするとか。それから、若いときなら、それなりのスピードでもいいのかもしれないけども、話に抑揚をつけるというかな。そうすると、よくわかりやすい。すると、自分のお話を説明するところのさっき、世界遺産の方がお話ししましたけども、やっぱりすると、だんだんわかりがいいんじゃないかなと思いましたので、次から発表されるときは声をしっかりお出しになってやってください。お願いします。（拍手）

中山：ありがとうございます。もうちょっと自信持っていていいということです。皆さんがやったのは自信を持って言ったほうがもっといい。もう1人自信を持って最後話しますか。聞いてなかったよね。

中村日留生（高校生）：聞き書きをして学んだことは、やっぱり、自分たちの生まれ育った地域の周りには、昔ながらの地形とか伝統とかが、なんかどどんああって、昔と変わらずにああって、それは、先人たちと受け継がれていってるし、自分たちもそれを築いていって、後輩たちにもそれを受け継がせていったらいいなと僕は思いました。（拍手）

男性 H：聞こえた。

中山：わかりましたか。

男性 H：さっきヤギの話ね、おいしい食べ方だったでしょ。ヤギはね、皆さんも、ヤギ汁がほとんど定番だと思いますけれども、実は喜界島とか、実を言うと、ヤギの刺身なんていうの。スーパーでトレイに入ってます。いっぺんみんな、ヤギどうかなあと思うかもしれないけど、ぜひ食べてみてください。

最高にうまいです。それと、ヤギ汁も結構いけるようです。(拍手)

中山：ヤギのおいしい食べ方までおっしゃっていただき、ありがとうございました。ここで、宇検からもいらしてるので、宇検から来た中條さんが。

男性I：方言のことですけれども、私なんか小さい、学校時代は、方言使ったらあかん。その当時の教育っていうものも今考えてみると、今になってから標準語使いなさいっていうそういうあれがない。ところが、今現在そのまま昔の方言が残ってるところがあるんです。それはブラジルなんですよ。ブラジルから7、8年前ブラジルで生まれた子どもが、親が生まれたところの、奄美大島、私と宇検村の久志に生まれ、親なんか、じいさんが生まれたところをぜひ1回見たいと来たんですよ。その子どもなんかあれですよ、ブラジルで生まれて、するとどうかちゅうと、この、おばさん、お孫さん、「テムド カラシ クレ」(手元を貸して)ちゅうた。テムドっていうのは知ってる？それからこう言ったんです。しばれ(シッコ)っていうのはわかる？小便のことね。ブラジルではシマの方言がそのまま残っているそうです。よその集落の人が聞いても、芦検の方に聞いても、どこの方に聞いても、ブラジルにシマの言葉が全然、残ってるちゅうこと。シマの人はなんで方言が消えていってかちゅうと、これは、時代って言ってもあれだけど、夫婦のあれが、大和ジョバもったりシヨウバヤ。(一同 笑う)

大和言葉使うのはなかなかわからんわけだもんね、そういうこともありますよね。うちなんかの孫なんかは、長男が四国の子をもらったもんだから、全然、シマの方言が使わなくて、〇〇は孫と使ったら、おじいちゃんそれは何ちゅう言葉ねって言いますからね。そういう家族的な、時代の流れのなかだけでも、とにかくブラジルちゅうところはいいところです。シマの言葉そのまま残ってますから。以上でございます。(拍手)

男性J：ブラジルでありがとうございましたって、オブリガートでしょ。

中山：逆輸入ということがありますので。標準語知らないでブラジルに行ったのでそのまま話していると、やっぱり古い方言が残っていたっていうのと、また、島唄のほうでも島踊りのほうでも大和に出た郷友会の皆さんがその後大阪に行って、昔の踊りがそのまま残っていて、シマに帰ってきたら昔の踊り教えてくれっていうことになった。そういったものもあって逆に言えば、シマ学がもうちょっとシマを知らんばいかんちゅうのは、やっぱり、郷友会の皆さんとの交流ちゅうのもぜひ必要かもしれないですね。いろんな意味においていろんな問題を掲げていますが、今日はやっぱり、行政に携わっている方も何人来てます。基本的に皆さんシマ学やってる人は、ほとんど地域の方々が主体となって、高校生も含めてですが、頑張ってる。そういったところについて、お2人見えてますので、一言ずつコメントを何かいただければと思います。

岡野隆宏：はい、すいません、途中からの参加になってしまいまして。それでもすごく楽しい時間でした。高校生の皆さん、ほんとに、皆さんから拍手がたくさん出て、すごく期待があるんだろうなと思っています。先ほどの話のなかで言葉の話ありまして、皆さんからもいろいろアドバイスがありました。一応聞き書きは、言葉もそのときの言葉を記録するっていうのを大切にしましょうっていうことにしてまして、方言なら方言をちゃんと記録するっていうことを大事にする。変に訳さないっていうことがとても大事だというふうに言われています。それはほんとにその言葉というものを残していくという1つのきっかけになりますし、その聞き書きということを通して、世代間の交流っていうのもできると思いますので、そういった意味で聞き書きもその文化という見直しだけじゃなくて、人と人とのつなぎ直しの意味ですね。先ほど家族の形とか変わっちゃってなかなか話がなくなったというときに、ちょっとお話聞かせてよっていう形でもう1回つなぎ直す1つのきっかけにもなるんじゃないかなと思ってます。話を聞くということは、今いろんなところですごく大事になってきているというふう聞いてます。なかなかゆっくり話をして話を聞くという時間がなかなか皆さ

ん持てていないんじゃないですか。そこにいろんな人間関係のいろんなのが生まれてくるかもしれないんですけど、話をしっかり聞くっていうことが実は話をしている人にとってすごく気持ちをなごませたり、あるいは元気を取り戻せたりするということで、今特に高齢者の方のボランティアとしてお話を聞くという傾聴ボランティアっていうのもすごく大事にされてまして、そうすると昔のことを思い出して脳が活性化して元気になるっていうこともありますので、ぜひ聞き書きのそういった効用も含めて、地域のいろんな見直し、それから世代間のつながり、それからまた元気になってもらうっていうようなことで続けていただきたいと思います。特に若い高校生の人がね、そういうのをやってくると、きっとおじいちゃん、おばあちゃんも喜ぶと思うのでぜひ頑張ってください。どうもありがとうございました。（拍手）

中山：ありがとうございます。確かに私が行くときは、茶しか出ないけど、彼女たちが行ったときにはお菓子も出たりして。（一同 笑う）

お土産までもらって、最後2人に追加で何か一言あれば、聞かないと。田畑先生、泉先生、何か一言ありますか。補足、最後このこと言い忘れたっていうことありましたら一言。

田畑満大：まとめなどをしてないので、補足ということはございませんけれども、今方言のことでいろいろございましたけれども、やはり、取り組みの仕方、こっちからも出ておりましたね。そういうことと、もう1つ、私が今までちょっと勉強をかじった『南島雑話』のなかに非常に方言が多いんだけど、鹿兒島の方が記録してるので、地元の方言そのまま記録されてない。したがってそれを解釈していくときにどうだろうか。そういう悩みが非常に多いんです、私なども方言、自分でも使うことは使ったりするんだけど、やはり地域が違うので。私は徳之島なんですけど、大島の話は聞くことは聞いてもわからない。話せない。そういうのがあります。そういうのでやはり、いろんな場を持つことによっているところの、地域の言葉が聞けて、ああ、いい勉強になったなと思って今までずっと歩いてるところなんですけど、龍郷のあれだけじゃなくて、その屋敷林のことやら、たとえば集落の構成、何て言うんですか、北向きの卒塔婆と言われたところ、内陸盆地みたいな、そういうところの違いなどをこうして、見てまとめようなんて考えてはおるんですけど、なかなかそこまで至らないというのがあって、ぜひ皆さんの力を借りてそういうのをある程度の一定のまとめをしたときに補っていただきたいな。

中山：もう1回こういう機会を持ちましょうか。

田畑満大：ぜひお願いしたいなど。

岡野隆宏：ああ、いいですね。

中山：ありますか、一言。

泉和子：今日はありがとうございました。若いってやっぱりいいですよ。（一同 笑う）

20代後半に、『大和村の昔話』っていうのを共著で、島口でそのまま書く、そして訳すっていうのをやったんですけど、島口は全然わかりませんでした。でももう夜な夜な頑張っていて、なるべく大和村のイントネーションがわかるように一字一句書き起こしたんですが、やっぱりしゃべることはできません。英会話を学ぶように、それも今後ちょっとしゃべれるようになっていきたいなと思います。掘り起こして、結んで、つなげていくということで、このシマ学の輪も広がっていくと思います。若い人頑張ってください。ありがとうございました。（拍手）

中山：はい、ありがとうございました。夏、高校生を指導したときに、18名来てやったときの指導者になっておいでです。ありがとうございました。じゃ、もう最後にちょっと時間をオーバーしましたが、最後に。菊地先生、お願いいたします。

菊地：どうも今日はありがとうございました。ほんとに今日いろんなことを学んだというか、とっても面白かった、非常に楽しい時間でした。今日のシマ学という取り組みそのものが総合学というか、ほん

とにいろんなことをやっています。島そのものを総合的に研究したり活動したりする取り組みなんじゃないかなと思いました。そして、地域の人がやっているということ、またなかなかできないことだと思うんですね。皆さんそれぞれの暮らしがあったりするなかで、シマ学をやっているっていうことが、皆さんにとってみたら当たり前かもしれませんが、僕らからすると、やはりここならではの取り組みじゃないかなというふうに思いました。皆さんのお話を聞いて幾つかちょっと気になった言葉を紹介させていただいて終わりにしたいと思います。

1つは、新元さんが島の奥が見えるというお話をしましたね。なんていうか表面だけでなく奥行きがあるということだと思うんですが、そういうお話があったと同時に、高校生が、島口がわからないというか、同じ島でも全然隣でやっぱり違うということとか、あるいは泉さんも20集落で、やっぱりそれぞれ違いがあるとおっしゃった。比べるということがこのシマ学のなかでたぶん行われているんじゃないかなあと思ったんですね。そういう奥が見えて、また比較をして、違いを見えるということで、たぶん宝物の見える化というか、みんなで共有できるようになってきてるんじゃないでしょうか。中山先生がおっしゃってたことだと思いますが、みんなで大事なものが見えるようになって、お互いが共有できる、一緒のものとして考えられるようになると、それがだんだん世界につながっていくことにもなる。奄美の価値が世界でも非常に重要だということが、みんなで共有できてくるようになってるんじゃないかなと思いました。

岡野さんが、奄美には世界が注目するヒントがあるとおっしゃいました。アマミノクロウサギのような弱い生き物でも生き残っている、人と自然との付き合い方があるということを描き出されました。そういうことが、このシマ学の取り組みから世界に向けてどんどん発信できていくんじゃないかなと思うんですね。そういうことがあると、世界からまた集落のほうに、たぶん戻ってくると思うんですね。世界に向けて発信したあと、やっぱり自分たちの島がどういう島で、どういう島に残していきたいかっていうことがまた考えるヒントが出て来るんじゃないかなと思いました。そういう意味では地域の人々が主体となって取り組んでいるほんとに総合学で、これからの人と自然の関係を考える新しい取り組みじゃないかなというふうに私は思いました。できれば、ときどきお邪魔させていただいて、皆さんと一緒にまた奄美のことをちょっと考えさせていただければと思います。こういう若い子が活動してるっていうこともなかなかないことだと思いますので、これがうまく継承できるように皆さん頑張ってくださいと思います。どうも今日はほんと、ありがとうございました。(拍手)

中山：ありがとうございました。今日は皆さん、シマ学やってる皆さんに、一堂に集まってこうだと言って、ワキャ(私たち)シマやれば世界に通用するよっていうことをまたもう1回再確認をして、明日、明日は宇検のシマ学ですので、また参加される方も、時間のある方は宇検のほうに。

男性K：ちょっと聞きっぱなしばかりしていますと。もう、わたふくるる思い(お腹がいっぱいになる思い)、はらふくるる思いがしますので、一言言わせてください。

高校生の皆さん、ほんとにご苦労さん。皆さんのようなね、若いときに、何か細胞の1つでも、種を1つ蒔かれると、だんだんだんだん成長していく。知的にも体力的にも増えて、細胞分裂をするようになって、いろんなものが飛び込んできますから、こういう問題についてね、文化遺産とか、自然遺産とかっていつてることなどについてどんどん資料など集められて、自分を成長させてください。それから、文化遺産も、やがてね、これ時間の問題で、奄美もだんだんすたれていくんじゃないか、こちらに島唄の大家がおられますが、島唄も方言がなくなっていくと、だんだん滅んでいくんじゃないか。だからね、どうするか、どういうふうにあれしていくか。学校教育などにこれをどう取り入れるかっていう、大事なことじゃないかと思いますね。文化遺産もだんだんこうなっていく。世界遺産にこうしようとね、やっていこうっっちゃうんだけど、文化遺産もこうして危機に瀕

してる。それか自然遺産。みんなね、見えないかなあと僕思うときがあります。正月にね、正月だからというので、こんな紙切れが、門などに貼るようなね、なんですか、門松の代わりに配られますね。あ、これは大事なことだ、自然を大事にするっていうことはこういうことか、だから植物など、森にあれしてしまったら、松の木を各家庭に、ずうっと門松飾ったら、松の木がなくなるなあって、いい考えだなあと思いました、これ。ところがね、何をばかなことしてるかと。奄美の自然を見てごらんさない。ね、自然を大事にしましょう、自然遺産だなどと言ってるんですけど、何言ってるか、寝ぼけてること言うなって僕は思いますよ。うちなどでも自然を大事にしましょうって、おられますよね。松はどんどん枯れていく。松がどんどん枯れていく。そしてね、人々は松に恨まれてるんじゃないか、戦争が終わったときにあの松を利用してね、塩を炊いたり、砂糖をつくったりしておった。ところが今なんにも利用してない。活用しようもしない。これを、いっぱい関心を持っておられる人などが、これをどう活用するか、あの枯れかけてる松の木をね。あの、登録、あとちょっと、月日残りがありますが、その間に行政などにも、うちにも議員さんなどもおられるんじゃないかと思えますね。そういうような、議会などでね、取り上げてあれを託していかんと。これからはね、自然現象であるかもわからない。針葉樹がなくなってって、常緑樹の世界になるんじゃないかと思えますね。大島の山なども、ちょっと低くなったような感じがしますよ。5メートルぐらいホシノの山など、低くなったように見られる。松の木が枯れてるものでね。だから、松などをね、あれするときも自然を大事にするちゅうことじゃないかと思えますね。それから方言、これをどう育てていくかっていうことなどね、やらないと、空論に終わってしまうんじゃないか。

中山：ありがとうございます。（拍手）

いや、松の利用ちゅうのは、確かに、資源をね、利用せねばいかんと、使わんといかんのに、やっぱりああいうところに放置するちゅうことはよくないと思うし、そしてやっぱりそういった意味ではやっぱり世界自然遺産に取り組むっていうのであれば、自然の活用ちゅうのも、やっていかんばちゅうことのお叱りだと思います。ありがとうございます。そして、あとは、こういったことをやっていて、やっぱり世界につなげるぐらいに持っていきこうっていう思いは島人の皆さんがそれぞれで取り組んでいければと思います。

今日はこれで終わりたいと思いますが、これだけの大島地区で、これだけの宇検から、瀬戸内から来ていただいてやっているの、こういった、また1回の集まりじゃなくて、2回か、何か、連絡協議会でもつくって、やっぱりシマ遺産っていうのは大切なものだちゅうことを立ち上げていくことも必要なと思います。行政でできない民間でできない何かをやりませんか。それがシマ遺産のやってることだから、もうちょっと頑張っていたら環境省も地球研の方々もこうしてお越しいただいたということなので、ぜひ頑張っていければと思います。

今日は最後にこれだけ、言わなければという人いますか。いいですか。じゃあ閉めたいと思います。ケムン村の皆さんも、宇検村からも瀬戸内町からも、名瀬からも、龍郷からもありがとう、あ、大和からもありがとうございました。これで閉めたいと思います。北校生の皆さん、本当にありがたさまりようた。（拍手）

■ 考察

今回の座談会の目的は、世界自然遺産登録が目指されている奄美群島において、世界遺産を持続的な地域づくりのツールとして使いこなすための地元主体の取組みの可能性を模索するものであった。具体的には、シマ学（集落遺産調査）で行っている聞き書き調査の活動の方法とその成果を共有することに焦点を当てた。当初は、シマ学の中心人物である中山清美氏と環境省の岡野隆宏氏、大島北高校の生徒さんたちといった少人数での座談会を企画したが、イントロで述べたように、奄美でシマ学に取り組んでいる人たちが集い、お

互いの活動を紹介し合うシンポジウムという性格が強い座談会になってしまった。これは、中山氏が、菊地の提案を受け、地元で意味があり、使いこなしやすいイベントへとトランスレーションした結果といえよう。当日の参加者は50名を超え、奄美新聞社、南海日日新聞社、南日本新聞社の3社の取材があり、翌日には2社の紙面に紹介記事が掲載された。

奄美大島でおこなわれているシマ学の関係者が集うイベントは、今回が初めてであり、それぞれのシマでおこなっている聞き書き活動といった取り組みを共有する場となった。そこに地球研の菊地、環境省の岡野氏など専門性を有する「よそ者」がかかわったことで、シマ学の成果を多面的にとらえ直す契機にはなったと思う。また高校生が発表したことにより、この座談会が異世代交流と島の文化を継承する教育の場にもなった。高校生が発表すると自然発生的に拍手が巻き起こり、そこに地元の人が時にあたたかい感想をもらし、時には辛口の注文をつけていた。

今回の座談会を機に、シマ学のプラットフォームづくりの機運が高まることになった。座談会という場をつくることによって、次のアクションに向けた動きが創発されたといえる地域の住民が地球研のTD座談会を主体的に読み替え、自分たちの活動に使えるツールにしていったプロセスともいえよう。今回の座談会は、世界自然遺産を地域が主体的に使いこなすための運動の場でもあった。

こうした地域住民と研究者の可変的な相互作用がトランスディシプリナリティ研究の一側面であると感じた座談会であった。

